

震災から学び 伝えたい教訓

東日本大震災は、非日常を生みました。このことは、それまでの当たり前にあった日常が、いかに価値あるものであったかを、福島に生きる一人一人に感じさせたのではないのでしょうか。だからこそ、今この時を大切に生きていこうではありませんか。東日本大震災に関わる非常事態への対応、当時感じた思いや願い、子どもたちや先生方へ、さらには自分自身へ、それぞれに伝えたい思いを各支会から寄せていただきました。

震災から得た学び・伝えたい思い

「現場を見る 現場で聞く」

川俣町立福田小学校 校長 大内 雅之

「学校は復興の最大の拠点」「風化は許さない」「風評は許さない」

これらの言葉は、節目節目でキーワード的に自分の中に反復される言葉であり、その大切さは自覚しているつもりである。しかし、震災直後の取組・意識と今の自分を客観的に比べると、私自身の中で「震災／原発事故」が薄らいでいるのではと思うところがある。毎年校長として子どもたちには震災・原発について語りかけてきた。言葉の中身はほとんど変わらない。同じようなことを同じように継続して伝え続けることの大切さがあることも十分わかっているつもりである。しかし、話し終えたあとは「伝える側の『熱さ』は以前のようなものではないのではないか」「本当に子どもたちに伝えたいことが伝わったのか。」と自分自身に問いかける。単に、時間の経過によって仕方がないことではすまされないように感じる。福島人であり、震災を経験した当事者である私がそうであるならば、震災の後から生まれた子どもたちや他の震災被害のなかった地区などの人たちからすればなおさら意識が薄らぐのもわかる気さえする。善し悪しは別として。そして、これは私だけの問題なのであるか。

そんな中、福島地区小学校長会で福島第一原子力発電所・その周辺の小中学校を視察する機会を頂いた。原子力発電所の様子を見せていただくと、廃炉に向け片付くがれき、作業環境の劇的な改善、新たな施設の建設等、復興への着実な前進を実感できた。しかし一方、高い空間線量のままの場所、全く手つかずの6号線沿線の店舗、封鎖されたままの町道、時が止まっているのではと思える風景もかなり残されていた。また、小中学校の視察では、当時の生々しい話あり、現在の大変な状況の中でもなんとかしてでも前に進もうとする力強い話ありで、自分の今の「震災／原発事故」への取組・意識の低さを恥じた。

現場を見ること、現場で聞くこと、現場に関わること・・・、とにかく現場を知ることがなによりも大事であるとあらためて感じている。原子力発電所や周辺の小中学校の現状を肌で感じることで意識が2011. 3. 11 当時を引き戻される。「熱さ」が戻ってくる。子どもたちは、教師が話していることが本当のことなのかどうか、どれくらいの真剣さ・熱さがあるのかを察知する能力はずば抜けている。私たち校長は子どもたちに伝える言葉を吟味し、本当に思っていることを、熱さをもって伝えなければならぬと感じる。この震災・原発事故については特に。

福島県小学校長会の補助で成立している本視察は、大変ありがたい。これからもずっと継続してほしいという思いである。ただ、補助のあるなし、多忙さの度合いにかかわらず、多くの教員が、いや、校長はもちろん、全教員が行わなくてはならない活動であると考えている。福島の復興をリードする子どもたちを育てるために。

「寄り添う」

川俣町立富田小学校 校長 小松 浩行

揺れがなかなか収まらない中、当時私が担任していた三河台小学校の4年生の子どもたちは大泣きとなった。机の下にもぐってはいるものの体験したことのない大きな揺れに、私も動揺した。しかし、なんとか子どもたちの不安を少しでも取り除いてやりたいと「大丈夫だ。先生が必ず守ってやる！」と思わず大声で叫んだ。揺れが収まったが、校内放送も停電で入らず、学年主任の判断で、避難を開始した。避難の途中も自分の荷物を途中で落としてきたり、ジャンパーを着てこなかったりと動揺は軽減しなかった。

校庭に避難し、全員の無事を確認した。寒さが身にしみる。校舎は耐震工事を終えたばかりだった。耐震工事のためにプレハブの校舎があった。避難直後、引き渡しを開始したが、残っている児童は、そのプレハブ校舎に二次避難した。

その直後、体育館に新幹線の乗客が避難してきた。突然のことで、当時の校長先生も戸惑ったのではないかと推察する。続々と避難してきて体育館がいっぱいになった。

子どもの引き渡しの対応、避難してきた人の対応、二つが重なり教職員で手分けをして対応した記憶がある。夕方、なんとか引き渡しを終えると私は我が子を迎えに行った。学童保育でしっかりと見守っていてくれた。感謝である。避難してきた人の対応があるため、我が子連れて職場に戻った。我が子を職員室で休ませ、避難してきた人の対応にあたった。

体育館は、新幹線の乗客で満杯である。寒かったので、石油ストーブを準備した。食料や水はない。

そのとき、様々な人たちがいた。中には苦情を言ってくる人もいる。みんないらいらし始める。私は理不尽さを感じ始めた。

プレハブ校舎にも地域の方が避難し、学校は避難者でいっぱいになった。1週間ほどいただろうか。私は、市からの依頼で給水活動にも出かけた。ここでも、苦情を言われる。「まだ水は来ないのか」「おそい」と。私も言い返したくなる気持ちもあったが、「もう少し待ってください。必ず来ますから」といらいらする人たちをなだめた。

その年の夏休み、日直をしていた日にある老人が花束をもって学校に来た。その老人は山形からやってきたとのこと。「地震の時に新幹線からこの学校の体育館に避難させていただきました。感謝を申し上げたくまいりました。」と花束をおいて、去って行った。

私はそのとき、理不尽さを覚えたことや文句の一つも言い返したくなった自分を恥じた。避難してきた人や困っている人に本当に寄り添って対応していたのか？と自問した。

私たちの仕事は、よく「子どもに寄り添う」「保護者に寄り添う」ことが大切であると言われる。その大切さを十分に分かっているが、この老人に会ってから、相手の立場に立って心の底から寄り添わなければと考えるようになった。

この老人から、大切なことを学ばさせていただいた。この老人の方以外にも後に感謝の意を伝えられたこともある。中には紅白出場歌手もいた。校庭で無邪気に遊ぶ子どもたちを見て歌を作ったときいた。寄り添って支え合えば、必ず復興できると信じる。

『話し合う』こと

川俣町立飯坂小学校 校長 丹伊田 伸哉

震災発生直後、勤務していた社会教育施設が避難所に指定され、その運営に携わることになりました。放射性物質が拡散すると混乱が加速。子連れの方、年配の方…様々な人が続々と施設にやってきました。

「浜通りからようやくここまで来たのに、どうして中に入れてくれないの？」

スクリーニングが済んでいない場合は入所不可であったため、入所をお断りしなければならない方もたくさんいました。その時のことを思い出すと、今でも胸が痛みます。

かくして避難所での共同生活がスタートしました。住んでいた地域、生活環境が大きく異なる家族が急の一つ屋根の下で生活するわけですから、当然様々な問題が生じます。

「～ができない」「～はおかしい」「～がうるさい…」

毎日、様々な苦情や相談が運営事務局に寄せられました。当初は事務局からの指示や調整で問題を解決・処理していましたが、やがてそれも難しくなってきました。そこで必要となったのが「当事者による交流・直接対話」、つまり「話し合い」です。

各自が抱える課題や悩みをグループ代表が集約し、それを代表ミーティングで話し合います。課題を分類し、優先順位をつけ、解決策を話し合う。大きな課題は全体会を開いて全員で解決策を考え、共通理解を深めていく…この「話し合い」により、避難所の生活環境はますます改善されていきました。

この時、避難所で行われていた話し合いを「学校教育」に置き換えて考えると、それはまさしく「学級活動」の話し合いそのものではないかと感じます。生活上の諸問題を自分たちで見つけ、話し合い、折り合いをつけ、解決を目指していく…。現在、教科の授業において「話し合う」ことは重視されていますが、特に学級活動において自主的に話し合い、問題の解決を目指すこと、その一連の取組の大切さを肌で感じました。

「話し合う」ことによって解決できることがある。「話し合う」ことでしか解決できないことがある。

「話し合う」ことにこれからもこだわりながら指導を進めていきたいと考えています。

福島市立立子山小学校 校長 稲川 竜寿

積み重ねてきた過去よりも未来の方が多い子どもたち。彼らの前向きな行動が、積み重ねてきたものを失い希望が持てなかつたお年寄りたちを再び元気にした。子どもたちのエネルギーが地域を復興へと向かわせた。子どもたちの力、地域における学校の責任を再認識した。

「震災当時を振り返って」

福島市立福島第二小学校 教諭 長谷川 央樹

東日本大震災から、9年が経とうとしている。私は震災当時、浪江町立津島小学校に勤務していた。震災後、学校は避難所となった。原発事故により避難所は閉鎖、地域の人たちは避難を余儀なくされた。そして子どもたちも…。

震災直後、私は様々な関係機関の方々の御協力を頂きながら、子どもたちの所在の確認や新しい学校への転入手続き、心のケアなどに従事した。そして、震災後の5月より福島市の荒井小学校に兼務職員として派遣された。また、浪江町から89名の避難児童が荒井小学校に転入した。着の身着のまま避難してきた子どもたちにとって、新学期を迎えることは想像を絶するほど困難な状況であった。

また、土湯温泉の旅館や避難所からの登校は予想以上にストレスの伴うものであった。それは受け入れる学校現場も同じような状況であった。自らも大変な状況であったにも関わらず、「少しでも避難している子どもたちが前の学校と同じように生活できるように」と受け入れてくださった学校の先生方はじめ関係機関の方々の温かい御配慮、御支援を賜り、新学期を迎えることができた。クラス編制

や名簿の作成、学用品の準備等についても並々ならぬ御配慮があったことは言うまでもない。その思いが結集して、子どもたちが学校生活を過ごせることは、本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。

兼務職員で勤務していた学校での出来事である。避難児童専用のスクールバスを待っていたときのこと、ある子どもが

「今頃、津島は雪が積もっているかな？」

と寂しそうな顔をしてつぶやいた。

堰を切ったように別な子も言った。

「浪江の時、友達からもらった年賀状が宝物なんだ。でも、浪江の家にあるんだ。」

と明るく教えてくれた。でもどこか悲しげで堪えている表情であった。

そんな時、そばに寄り添い子どもたちと故郷の思い出話をする。震災後、子どもたちは学校生活に適応しようと必死であった。必死さゆえに弱みを見せず、我慢していた。教師は傍らでつらい思いを共有した。気持ちを言葉で表現することによって、内面に隠している思いをはき出させる。それにより、子どものストレスが軽減され、ストレスマネジメント（ストレスと上手につきあうこと）の能力が向上するのだという。

ひとえに「もう9年経ったんだなあ。」という時の速さを感じるが、この歳月は様々な困難と真っ正面から向き合い、考え、悩んだ日々でもあったと思う。しかし、このような厳しい環境の中で、子どもたちは前向きに、そして絆を深めながら生活してきた。その子どもたちの強さと明るさに頭が下がる。

震災時に勤務していた学校は、今も二本松市に避難している状態である。しかし、震災後の今だからこそ、子どもの学びに火を灯し、それを灯し続けなければならない。日々何をしなければならないのかを、絶えず追い求めることで、教師の力が高まり、子どもたちにも力が付く、というまぎれもない事実を真摯に受け止めなければならない。

私は震災からまもなく10年を迎えるにあたり、改めて自らの人生を創り上げる子どもを育てられるような教師にならなければならないと思っている。そして日々の教育活動を振り返り、自分の指導の未熟さを強く反省した。しかし、そこから次につながる課題づくりができたことは、未来を共に歩もうとする成果といえる。これからも子どもたちと共に歩んでいきたい。

「放射線教育」

伊達市立伊達東小学校 校長 堀部 誠

東日本大震災に伴う原子力発電所事故により、福島県では放射線に関する教育が各校で実施されている。現在、小学校の高学年になれば、放射線の種類や性質、放射線の単位や測り方、さらには放射線の人体に対する影響などの知識を身に付けている。今後、正しい知識も必要だが、同時に、放射線によるいじめや差別をなくすための教育、さらには心のケアの必要性を感じている。放射線教育はもちろん、道徳教育や人権教育にもじっくりと取り組みたい。

「チェック！チェック！」

伊達市立上保原小学校 校長 伊藤 久美子

後ろの書棚のファイルがドサドサッと倒れ、書棚に積み上げられていた段ボール類が飛び出すように落下。図書室の本という本も一冊残らず床に投げ出されていた。あの震災以降、特に「整理整頓をする」「転倒防止策を完全に」「高いところに物を置かない」と意識していたが、ふと気がつくといよいよ加減になっている自分がここにいる。職員室の書棚、教室の本棚、図書室は大丈夫？あの二段重ねになっているロッカーは、このままでよいのか？学校訪問のご指導に頼らず、自分自身の意識を再度確かめる必要がある。

「見える化して意識の備えを！」

伊達市立梁川小学校 教頭 緑上 隆

私が震災から学び伝えたいことは、普段の生活の中での「備え」です。「物の備え」はもちろんですが、それ以上に大切なのは「意識の備え」ではないでしょうか。しかし、いつ起こるか分からない災害に対して常に意識を持ち続けることは難しいものです。そこで、防災用品を見える所に設置したり、命を守る標語等を掲示しておいたりして「見える化」しておけば、意識の備えにつながると考えています。

「震災から学んだこと」

伊達市立大田小学校 校長 佐々木 誠一郎

『ふくしまの絆』「新聞報道」の欄に平成24年4月5日付『福島民報』の記事が載っていました。「転入先で心ケア」の見出しで、檜葉北小学校の教員が受け入れ先の高田小学校で、避難児童の心のケアにあたっている内容です。「大丈夫、安心して」、彼の子どもに寄り添う姿が印象的です。教頭として同じく檜葉小に勤務していた当時のことが甦ってきました。

あれから9年経ちます。復興も進みましたが、震災、原発事故はもとより、いじめ、不登校、自殺、虐待等子どもを取り巻く問題は日に日に厳しくなっています。「子どもに寄り添い、子どもと共に歩む。」震災を通して、子どもが困難な問題に直面した時、いつも傍にいて、共に悩み、考え、解決できるのが教師だと改めて学びました。そうありたいと強く願い、教職員にも常に語りかけています。

「今、思うこと」

伊達市立堰本小学校 校長 高見 良典

震災による原発事故の影響で、福島への復興への道りは特殊である。未来ある子どもたちに、先が見えない廃炉作業、固定化しつつある風評といった大きな課題を残してしまうのは忍びないが、だからこそ、今この時代を生きる我々がやるべきことは、原発事故を乗り越え、この福島で、自らの意思で、たくましく、豊かに生き抜くことができる次の世代を育てることなのだろう。頑張りましょう。

「思いが子どもを動かす」

伊達市立月舘小学校 校長 邊見 年成

震災から2年がたち、私は全校避難し、他の学校の一角を借りて再開している中学校に赴任しました。

避難して誰もいなくなった本校校舎に行ってみると、教室の黒板に、「今日は、再開の日です。」と書かれています。きっと、教室を立ち去る直前、担任の先生が絶対に戻ってくるという強い思いを持って書いた言葉でしょう。その言葉を見たとき、胸がぎゅっと締め付けられ、涙があふれてきたことを今でも鮮明に覚えています。

震災後、子どもたちと先生方は、「ふるさとの人たちを元気にしたい。」と全校合唱に取り組んでいました。昼休みに、率先して集まり、日々練習に取り組んでいました。今振り返ると、「私たちの合唱でふるさとの人たちを元気にする。」それが、子どもたちの誇りにもなっていたような気がします。

文化祭当日の合唱発表。子どもたち一人一人の思いが、表情、声からあふれ出ていました。保護者も、地域の方々も、子どもたちの姿に涙を流しながら聴いていました。合唱を終えた子どもたちの顔は、達成感に満ちあふれ、実にすがすがしいものでした。決してコンクールに出るような合唱ではありません。しかし、思いのいっぱい詰まった合唱は、人の心を動かす力があるのだと感じました。

子どもたちは、思いをもって一つの方向に向かったとき、人の心を動かすほどのすごい力を発揮する。日々の学校生活の中でもそのようなことはたくさんあるはずですが、その一つ一つを見逃さず、大切にしていけることが、子どもたちを育てることにつながると今、改めて感じているところです。

「福島の子だからこそ力を身につけさせたい」

国見町立国見小学校 校長 菅野 敏彦

東日本大震災、そして起こった原子力発電所事故からの1ヶ月ほどは、忘れようにも忘れられない。特に記憶に残っているのは、当時高校2年生だった娘の「お父さん、福島県はこれから一体どうなるの?」と言った時の、普段は楽天的な娘のそれまで見せたことのないおびえた表情である。福島県のあまりの惨状に衝撃を受け、将来に言い知れぬ不安を感じたことは容易にわかった。そして、同時にそのとき勤務していた小学校の子どもたちも、将来に大きな不安を感じていることだろうと思った。その後放射線問題に伴う風評被害が福島県を襲い、長期に渡って甚大な打撃を受け続けることになった。当時福島県の子どもの将来には大きな困難が立ちはだかったことは明白であった。

私は強く思った。困難に直面している福島の子だからこそ、生きる力を身につけさせ、困難に打ち勝ち自分の夢を実現することができる子どもに育てたい。そのために、知識、技能、思考力を身につけさせ課題を解決できるようにすること、苦しさに負けないたくましい心を育成すること、はつらつと生活することができる健康と体力を身につけさせること、これらに向けた実践に日々の教育で全力で取り組んでいかなければならない。

あれから10年目になろうとしている。今でも「福島の子だからこそ」という思いは変わらない。

「逆境からの学び」

伊達市立石田小学校 教頭 佐藤 秀和

東日本大震災は、経験したことのない、未曾有の大災害となりました。当時、一緒に学校で勤務した先生方とお会いする機会があり、目の前の子どもたちを守るために必死だったことを語り合いました。小学校生活最後の6年生を担当し、いろいろな制限のある中、「立派に成長させて卒業させたい」。その思いが子どもばかりでなく、私自身をも成長させてくれました。

卒業した子どもたちは、今年成人式を迎えます。

「『当たり前』の日常』にある幸せ」

伊達市立大石小学校 教諭 鈴木 慎

新設校の第1期卒業生との最後の2週間を奪われ、6学年主任として悔し涙を流したことは、今でも忘れられません。多くのものが失われ、手に入らなくなったとき、「当たり前」だった日常がどれほどかけがえのないものだったのかを実感させられました。「当たり前の日常」が実は当たり前ではなく、そのありがたみに感謝して過ごさなければいけないと、今でも自分に言い聞かせています。

「心に残る一言」

桑折町立釀芳小学校 教諭 小出 徹

A町の昨年の成人式に小学校時代の担任として招待され出席した。新成人たちは、当時の面影を残しつつ、立派な大人の顔つきとなっていた。彼らは当時中学1年生だった。震災直後、下校途中の数人の女子生徒が、母校の小学校の校庭に避難している子どもを見て駆けつけ、低学年の子どもたちを抱き寄せて「大丈夫だよ」と言葉をかけてくれたのだった。

式後、当時を振り返り、心強く頼もしく感じたことを話すと、「当然ですよ、母校ですから。」という言葉が返っ

てきた。郷土愛や愛校心など、特に力を注いで指導したわけではなかったが、若者たちの心には、確実にふるさとや母校を大切に思う心が育っていたことが分かり、目頭が熱くなった。

二本松市立杉田小学校 校長 岩淵 孝

管理職として忘れてはいけないこと。児童の安否確認、施設の応急措置…山積する問題に粉骨砕身して事に当たる教職員にも大切な家族がいること。

本宮市立五百川小学校 校長 安齋 宏之

防災・復興の拠点は、学校。学校を中心として、地域の豊かな関係性を構築しよう。
(スクール・コミュニティの構築)

二本松市立原瀬小学校 教頭 村松 泰二郎

過去から学び、今を生き、未来を創る。かけがえのない、私たちの大切な命。守るのは、私たち自身。

二本松市立川崎小学校 教頭 佐藤 伸

地球は生きている。この巨大なエネルギーの前に人間は無力だった。でも、奢らず謙虚な姿勢で震災を乗り越え、人々は生きてきた。そしてこれからも生きていく。

二本松市立渋川小学校 養護教諭 鈴木 萌

学ぶことで世界に笑顔と幸せが増える。「誰かのため」に学ぶ、利他主義の教育を新たな学びのモデルとして、福島から発信していくことが大切。

二本松市立旭小学校 教諭 佐藤 千鶴子

「想定外」が起きる時代。もしもに備えた訓練と対策を！

二本松市立東和小学校 教諭 大和田 樹

教職2年目、埼玉の地で被災。報道を通して知る変わり果てた福島の様態に触発され、ふるさとの復興を誓う。今、福島県人としての誇りを胸に「うつくしま ふくしま」の復興をめざす。

本宮市立和田小学校 教諭 吉田 茂

便利で快適な文明生活はいとも簡単に崩れる。備えよ常に。

本宮市立白岩小学校 教諭 大谷 弘道

いくら悲しくても、苦しくても、それ以上に悲しみ、苦しんでいる人がいる。それが震災で学んだこと。亡くした人たちのためにも、生きている私たちができることをやろう。それも震災で学んだこと。

二本松市立二本松北小学校 校長 紺野 宗作

「先生、俺しか残んねがった。」胸の中で泣きじゃくる教え子は、「負けねぞ。負けねぞ。」と懸命に生きる決意をする。今を生きる。

二本松市立岳下小学校 校長 佐藤 聡

～1日一ネタ楽しい授業・1日一ほめ嬉しい授業・1日一押し頑張る授業～授業づくりは人づくり！
震災から再認識する人づくりの大切さ！！

本宮市立本宮まゆみ小学校 校長 古田 幸裕

いにしえからの教えを貫き、未来を創造し、子どもたちに真の力を。だから今こそ“てんでんこ”、自らの意思で前へ進める子どもたちに。

二本松市立二本松南小学校 教頭 佐藤 和彦

考え得る最悪の状況の「さらに一つ先」を想定し、対応策を準備しておかなければならない。用意周

到・準備万端が肝要。

二本松市立小浜小学校 教諭 菅野 由夏

ふるさとの力を活かし育てたい！ 颯爽と未来へ歩む子どもたちを。

二本松市立大平小学校 教諭 佐藤 宗子

震災の記憶がなく映像でしか知らない子どもたちも増えてきました。自然災害は繰り返します。学びの場を設けること、伝え続けることが私たちの役割です。

二本松市立新殿小学校 教諭 遠藤 淑子

避難先の学校で担任する子と迎えた始業式。知らない校歌を聞いたとき、やるせなさや悲しさがこみ上げた。母校の校歌はふるさとで歌わせたい。

郡山市立赤木小学校 校長 鈴木 久

『安心』を得るために大切なことは 毎日正しい情報を発信すること

そして、家庭・地域の協力を得るには まず学校でできることを実践し続けること

放射線量の測定、学校での安全対策への取組、子どもたちの学校生活の様子などの情報を継続的に発信することで、理解が深まり、学校教育環境における「安心」を得ることができる。

そして、学校でできることを実践し続けることで、安全対策への理解が広がり、PTAや地域の協力が得られる。

郡山市立喜久田小学校 校長 吉田 知裕

「非常事態の時こそ『一緒にがんばる』がキーワード」

相双地区から避難してきた子どもたち、先生方が自校の校舎で教育活動を行うという経験から、大切なことは、「一緒に」という言葉だった。子どもたち同士仲よく、先生方同士仲よくをモットーに、休み時間の交流や、先生方同士の懇親の会など、一緒に共有できる時間を意図的に設定することで、寄り添えたと感じた。
(当時河内小学校教頭)

郡山市立芳山小学校 校長 吉川 和夫

「課題を共有し 校長一人一人の考えが全体に生きる校長会 災害時も強い力に」

課題を共有し、一人一人の発想や考えが全体に活かされたときに、相談し合い、支え合い、助け合い、励まし合うことができる。校長先生方の力を合わせたら、大きな力となることを震災から学んだ。震災後、何度も臨時校長会を実施し、対応を協議し共通実践した経験から学べたこと。

郡山市立穂積小学校 校長 松本 浩一

『勇気』、『元気』は自ら作り出すものである 奮い立たせるものである

震災後の避難生活から学んだこと。自分自身が感じ、自分自身が立ち上がるうとするから、「勇気」や「元気」が湧く。一日二日で、どうなるものでもない。自ら作り出した本当の「勇気」や「元気」こそ、新たな知恵や行動を生みだし、時に周りの人たちをも奮い立たせる力となる。

『望郷』 (4月10日)

ふるさとの桜よ あなたは誰に愛でられることなく ひとりひっそり咲いているのですか。

ふるさとの川よ あなたは だれにきかれることなく さらさらと水音を立てているのですか

ふるさとの空よ あなたは だれに見上げられることなく どこまでも澄みわたっているのですか。

ああ わたしをそだてたふるさとよ わたしをこよなく愛してくれたふるさとよ

わたしは ただふるさとを想い たった一つのふるさとを想い

今日も 遠いふるさとへ続く空を見つめているのです。

(当時浪江小学校教頭)

『すみれとたんぽぽ』 (『未来を拓く心のハンドブック小学校版』平成27年3月郡山市教育委員会より)

郡山市立T小学校2年児童の作品(当時)

校ていも つうろも みんなじょせんした。学校にくるさかみちも はげぼうずになった。

はるには すみれやたんぽぽの花で いっぱいだったのにな。

今年、春になったら はげぼうずだったさかみちに すみれとたんぽぽがさいた。

つよいな。

「大震災の教訓を引き継ぐ」

須賀川市立第一小学校 校長 永瀬 功一

本校の校舎は新築4年目の新しい校舎である。廊下は広く、各学年の教室前にはオープンスペースが設けられるなど、明るく開放感があり、子どもたちは元気いっぱい伸び伸びと学習している。しかし、このようなすばらしい環境で学習する以前は、プレハブの仮設校舎で不自由な生活を強いられていたこと、そして、あの震災の時には、校舎が崩れ、校庭が地割れするなどの大きな被害を経験したことを決して忘れてはいけないと思う。



震災直後の校舎内



震災直後の校庭



仮設校舎の外観

校長室には、当時の様子を生々しく記録した冊子や新校舎落成までの歩みが分かる資料等が保管されている。それらを読み返してみると、当時の校長はじめ職員がどれほどご苦労されて教育に当たっていたのかが伝わってくる。そして、あの混乱の中で、一人のけが人も出すことなく無事避難させるとともに、全員を無事保護者に引き渡すことができた、奇跡のような対応には本当に頭が下がる。そして、今自分が預かっている子どもたちや教職員全員を同じように守らなければならないと強く感じている。



新校舎の外観



廊下の様子

本校では行事や業間活動を利用して、年に6回の避難訓練を実施している。内容は火災や地震、不審者への対応等である。これ以外にも、授業参観日に合わせて児童の引き渡し訓練を実施したり、3月11日を震災を考える日と位置付け、災害に関する授業を行うとともに、安全への意識を高めるための全校集会を実施している。これらは、大震災を教訓とし、次の時代に生かしていくために継続して引き継いできたことである。そして、実施にあたっては、安全への意識を高めることは勿論、過去の出来事から「当たり前」の日常が「当たり前ではない」こと、現在のような恵まれた環境で便利に不自由なく学習や生活ができることのすばらしさについて、意識して伝えていきたいと考えている。



今年の避難訓練

現在の5・6年生は、いよいよプレハブの仮設校舎を経験した最後の学年となる。年々記憶は薄れ、今の生活が当たり前になっていくことは仕方のないことだとは思いますが、「災害は、忘れた頃にやってくる」ことを肝に銘じ、いざというときに自分で判断して行動できる子ども、判断に迷うことなく子どもたちの命を守る教職員、指示を明確にして、迅速に対応できる管理職となれるよう、日頃から常に危機意識を高めていきたいと思っている。



震災を考える授業

「“災害に強い” 湯本地区」

天栄村立湯本小学校 校長 中野 直人

天栄村西部にある湯本地区。人口約500人。湯本小児童8名（R元年度）。人口流出、少子高齢化の顕著な地区です。米作り、畑での野菜作り、温泉旅館業など、地元の自然とともに生活しています。

そんな平和な地区に、東日本大震災の約半年前に、「湯本直下地震（仮称）」が起きました。震度5弱、震源地は湯本大槻集落。家屋や道路に局地的な被害がありました。そして、「東日本大震災」。震度は5強で、近くの羽鳥湖堤体に何カ所も亀裂が入りました。

この二つの地震災害について、現在の私たち湯本小教員には経験がありません。この地で勤務する上でも、この時の様子や予防措置、安全対策、教訓などを共有しようと、地元の有識者（日本EIMY研究所主任研究員、本校保護者）のH氏の協力を得て、次のようなお話をいただきました。

- 1 ハザードマップを元にして備えておくこと
 - 最悪の事態を想定して作成された天栄村のハザードマップ。信憑性は高い。これを元に、避難経路や場所、役割分担などを明確にしておく。
- 2 山に入ることに慣れさせておくこと
 - 水害から逃れるために、近くの山の道のない斜面やがさやぶの道などを上って逃げる場合も考えられる。慣れるための訓練も必要と考える。
- 3 地域コミュニティの大切さ
 - 近所付き合いを大切にしておくことにより、いざとなった時の安否確認や居場所の特定などの早めの対応ができる。今後とも互いに関心を持ち、相互扶助・共助に心がける。



震災当時の本校の被害の様子

震災後は、湯本出身の方をはじめ、知り合いや温泉宿を頼って、驚くほどの人たちが湯本地区に来て、

すごい賑わいだったということです。食料は自給自足なので豊富、水もきれい、温泉があるのでお風呂も大丈夫と、まさに生き延びることができる場所だったのです。「このような地区・場所をしっかりと残していくことが、次世代をつなげていくことになる。」とH氏は力強く語っていました。

石川町立石川小学校 教頭 板橋 敬史

あの日、「地震に強い」と言われている石川町も、これまでに経験したことの無い、長く激しい揺れに見舞われました。地震が起きた時間、本校では謝恩会が行われていました。そして、子どもたちの出し物が盛り上がりを見せた頃に大地震が発生しました。静かな揺れがしばらく続いた後、激しい揺れに変わりました。短時間で終わるであろうとの予想に反して揺れは収まらず、その場にいた多くの者が身の危険を感じ始めたその時、大きな叫び声が耳に入りました。

「全員、すぐに外へ出る！」「あわてるな！」

声の主は校長先生でした。そして、その声を合図に全員の避難が始まったのでした。

「危機管理能力」は、管理職に求められる非常に大切な能力の一つで、子どもや職員の命に関わることであれば、なおさらその重要性が増します。

東日本大震災の後も、全国各地で様々な災害が毎年のように発生し、そのたびに被災した学校や児童生徒の様子、学校の対応に関するニュースが流れます。それを見ながら学校の危機管理のあり方を考えるたびに、あの時の校長先生の姿を思い出すのです。

玉川村立須釜小学校 校長 塩田 明美

2011年、3月11日の東日本大震災とその後発生した福島原発事故は、それまでに経験したことの無い恐怖と不安、そして、福島県全体に大きな混乱を引き起こした。私の住む石川郡内の学校では、大きな被害はなく、数日で学校再開となったが、その当時同じ時間に、住む家を失い、家族を失い、避難先で多くの苦悩をかかえながら現在の生活に至った方々がいたこと。そして、故郷に住むことをあきらめ、新しい地域で新たな生活を始め、困難に直面しながらも前向きに生きていらっしゃる方々がたくさんいることを決して忘れてはいけない。各学校そして私たち教職員は福島の復興が進む中、自分の勤務する地域で予想される災害は何かを明確に持ち、災害の恐ろしさの理解と命を守る防災教育を推進することの重要性を実感してきている。

また、東日本大震災では、地震後に巨大津波の発生が予想されたり、警報が出されたりしたにもかかわらず、児童生徒を適切に避難させなかった点をめぐって、学校の「過失」として、現在も争われている。大震災を経験した私たち教職員は、特別の教科道徳の授業を中心に、様々な機会をとらえて、児童生徒に命の大切さを考えさせ、困難を乗り越え生きる人々がいることを語り伝えていかなければならない。そして、学校管理下における児童生徒の「大切な命を守る」責任の重さを自覚し、福島の未来を支えていく児童生徒一人一人の夢と希望の実現のために努めていかなければならないと思っている。

古殿町立古殿小学校 校長 館 初浩

児童数130人程の学校の教頭として震災を経験しました。発生時校長先生が年休で不在のため、自分が指揮しての対応となりました。今でも、鮮明にあの時のことが思い出されます。

今、特に思うのは、いかに日頃から防災についての学校の体制及び保護者との連携を強化して備えるかです。当時はまだ、連絡メールが導入されておらず学級連絡網でした。そこでいざという時、方部ごとに歩いて連絡できるように、実家庭単位の連絡網を整備していました。また、先生方には、年度初めに担当した方部の児童の家を確認させていたので、震災発生後迎えの無い児童については、最終的に方部担当が送り届けることができました。また、先に迎えに来た保護者が、近くの方に声を掛けますと申し出ただけするなど、保護者間で今の状況を伝え合うことに協力的でした。この後の原発災害のための緊急一斉下校時は、学区内を消防ポンプ車の拡声器を使い知らせてくださった保護者もいました。そして、ありがたかったのは、年休を取られていた校長先生が予定を取りやめ、児童を下校させる頃、学校に急ぎ戻られたことです。これまでの対応を報告するとすぐに今日はこの後学校待機もありうるので、今の時間に自宅と家族を確認するように、と指示を受けました。お陰様で、自宅の状況を確認し、今後の自分の動きを家族に伝え、途中で車の燃料も満タンにし、非常食も持参して学校に戻ることができました。以後、心おきなく各種対応に当たることができました。

「子どもたちと先生たちがいれば、そこは学校となる」

田村市立瀬川小学校 校長 横田 善広

このタイトルは、平成24年4月に、いわき市内の職業訓練校を借り受け、楡葉町の小中学校が再開した時に、当時の学校再開に教頭として携わったの思い出です。

平成23年3月11日、原発事故により楡葉町の小中学生は故郷を離れました。やがて、子どもたち

は会津美里町内の小中学校へ落ち着くことができました。その後一年間、教育委員会では会議を重ね、線量の低いいわき市で小中学校を再開するという結論に至りました。学校関係者たちで最初に職業訓練校の建物を見に行ったのは翌年の平成24年1月。学校再開まであと3か月という時期でした。2階建ての建物は、細かい仕切りなしのワンフロアでした。もちろん職業訓練校の建物なので、昇降口、児童生徒用トイレ、校庭、体育館、プールなどはあるはずありません。

まず、いわき市内の教育関係施設への挨拶回りを教育委員会と校長先生方が担当しました。我々教頭たちは、今後のスケジュール作りを担当しました。教材・教具は、線量を測定して低い物を檜葉町の本校から持ち出すことにしました。ところが、机や椅子などの備品類は、外気に晒されて線量が高く持ち出すことができませんでした。備品を購入するにも、1年後の仮設校舎建設が控えている町の財政状況では困難でした。そこで、文科省の「東日本大震災子ども学び支援ポータルサイト」を利用する事としました。手分けして、全国各地の自治体や企業に支援を呼びかけました。全国的な少子化の影響で各地の倉庫に眠っていた備品・教材・教具類が、連日全国からいわき市へと運び込まれてきました。

次の課題は、教育課程の編成です。そのためには、いわき市内の教育・文化・スポーツ・観光施設など、授業に活用できる物なら何でもといった具合に調べました。そして、連絡をとり利用可能な施設・設備・物品をリストアップしていきました。学校行事も今の状況でできる範囲で、一通りの行事を洗い出しました。しかし、それ以前に大きな問題がありました。それは、いわき市内で学校再開をするにあたって、そこに勤務する教職員の住宅と通学する児童の住宅が確保できていないという問題でした。

ところが、どうにかこうにか問題は解消していき、タイトルの通りとなりました。

「3月14日(月)」

三春町立岩江小学校 校長 遠藤 俊一

「3月14日(月)」。この期日は、私が平成26・27年度校長として勤務した南相馬市小高区にある金房小学校本校舎2階の図書室黒板の右側に子どもの字で書かれていた日付である。震災がおきたのは3月11日(金)ではと一瞬思ったものの、すぐに私の脳裏にある思いが浮かんだ。おそらく、図書委員会の子どもが昼休みなどに本の貸し出しをし、昼休みが終わる頃に書いたか、または、図書室清掃担当の子どもが黒板をきれいにし、週明けの月曜日の日付を記入したのではないかと想像できる。書き記した子どもは、週明け14日の月曜日、次の日の3月15日(火)と、同じ時間にいつもと同じように日付を書いたであろうと想像すると・・・。

本校舎を離れて、同市内鹿島区にある鹿島中学校校庭の仮設校舎での教育活動を余儀なくされ、想像だにできない様々な困難が数え切れないほど山積している中、当たり前の日々の教育活動がいかに貴重な時間であるかを心底考えさせられる日々であった。

現在勤務する岩江小学校は、震災の年の8月、葛尾小学校より33名が転入してきた。子どもたちが前に在籍していた学校も県内、県外様々で、久しぶりに友達と再会できた喜び、そしてホッとした気持ちをかみしめたに違いない。子どもたちは、様々な困難を抱えながらも、教職員、保護者、地域が一丸となって寄り添うことにより、勇気と希望を少しずつ取り戻したことは想像に難くない。

時が経つにつれ記憶が薄れていくことは否めないが、だからこそ、一人一人の教員が現在おかれているそれぞれの立場で当時思いを馳せ、震災後の様々な困難を一つ一つ乗り越えてきたという自信を糧に、目の前の子どもたちに向き合っていくことが大切ではないかと思う。月並みな表現ではあるが、当たり前前の日常の教育活動がどれだけ有り難いことであるかをかみしめることを忘れてはいけないと思う日々である。

「ピンチをチャンスに！」「一期一会を大切に！」

小野町立飯豊小学校 校長 石井 研也

平成23年3月11日、東日本大震災により私が勤務していた小学校は、校舎の3分の2と体育館、校庭も使用できなくなりました。震災直後に6年を担任し、1年間2クラス合同で一つの教室で過ごしました。当時担任した子どもたちは、今年成人を迎えます。その後2年間、教務主任として勤務しました。図書室の一角が、校長室と職員室、事務室、保健室を兼ねており、長机とパイプ椅子が私たち七学年の事務机でした。子どもたちは、休み時間に外で体を動かして遊ぶことはできず、体育の授業や全校児童が集まる行事等は、近隣の公共施設で行いました。

そのように常にピンチと隣り合わせの毎日でしたが、学校経営をしていく上で貴重な学びの時間となりました。当時の校長先生は、「ピンチをチャンスに 楽しく！」と常に言うておられました。「在学している子どもたちが、マイナスの教育環境であっても、夢とロマンのあふれる小学校時代だったと思えるようにする。」校長先生のリーダーシップのもと、常に自分たちにできることを話し合っていました。実際は、話し合うというより、校長先生、教頭先生と同じ長机で日常の会話の中で自然に語り合っていたように記憶しています。私たちは、子どもたちのために「夢プロジェクト」を立ち上げました。校長先生が地域を歩き、一期一会を大切に信頼関係を築いてくださったことにより、保護者や地域の方々から様々な形で応援をしていただきました。私たちは、子どもを中心に据えて、真夏の雪遊びプロジェクトやプロ選手によるサッカー教室、アナウンサーによる言葉の教室等、様々な夢プロジェクトを実現しました。また、近隣の公共施設で運動会や学習発表会、卒業式等を行いました。それら一つ一つの場面で、一期一会を大切に感謝し、困難があっても前向きに行動する子どもたちの姿が見られました。ピンチをチャンスに変えるために、校長先生は常に真剣に前向きに進んでおられました。その姿は、

たくましくもあり、楽しんでいるようにも見えました。その背中を追うことで、私たちは、子どもの笑顔のために、前向きにやりがいを感じながら仕事をすることができました。

私は、その経験を心に刻み、いかなる時もピンチをチャンスに変え、一期一会の出会いを大切にしながら、未来に向かって夢を持ち続ける子どもを育てるために尽力してまいりたいと思います。

白河市立小野田小学校 校長 宗像 浩

- ・ 一度起きてしまった事実はもう変えられない。しかし、命ある未来であるならば、今の自分次第でみちを切り拓き、変えることができる。
- ・ ひとつの命はみんなの命でもある。人と人は、命でつながることでもともに輝き合うことを、私たちは永遠に忘れない。
- ・ 自然災害が多い日本の風土の中で震災をなくすことは難しい。しかし、私たちの責務は、悲惨な被災体験と様々な復興の取組を風化させることなく、子どもたちに自らの命を守るための活動を伝え、防災・減災の意識を根づかせることである。

白河市立大屋小学校 校長 今井 不二子

- ・ 震災が起きたとき、マニュアルがあっても、状況によってはあてにならなかった。何よりも頼りになったのは、先生方の判断力であった。避難訓練で身に付け、実際に役に立ったことは、机の下に身を隠すことと、指示をよく聞くことであった。
- ・ マニュアル通りにならないからこそ、万が一の事態に遭遇したとき対応できるように、日常生活での危機意識を高め、危険回避策をシュミレーションしていくことがとても大事である。

「震災10年目を迎えるにあたって」

猪苗代町立緑小学校 校長 佐藤 秀一

1 はじめに

東日本大震災、そしてそれに伴う原発事故から9年が過ぎました。

当時、小学校1年生だったあの子どもたちは、もう高校生になっています。

また、当時、高学年だった子どもたちは、成人していてそれぞれの道を歩んでいます。

そして、今、小学校で学んでいる子どもたちは、生まれていない、あるいは幼くて当時の記憶もままならない世代です。震災や原発事故に関してどのような思いを抱いているのでしょうか。

私たち大人にとっては、つい数年前の出来事であったとしても、目の前の子どもたちにとっては、ともすると、「昔（過去）の出来事」になっているのかもしれない。

2 当時のエピソードをもとにした「ふくしま道徳教育資料集」

私たち福島県の教員の財産のひとつに「ふくしま道徳教育資料集」があります。

この資料集は、その多くが大震災や原発事故の中から生まれたエピソードがもとになっています。

震災の記憶が希薄な（あるいは全くない）子どもたちに対して、当時の私たちが体験した思いに触れさせたり、考えさせたりすることのできる貴重な資料集だと考えます。

震災の経験があったからこそ気付けた「いのちの大切さ」、「家族愛」、「友情」、「郷土への愛着」、「人と人との絆」、「前向きに生きる人間のたくましさ」……。今後、薄れていってしまうかもしれない当時の思いが、この資料集には確かにちりばめられています。

そして、この資料集には、「ふくしまならではの道徳教育」を進めていこうとする強い思いが込められています。

震災10年目を迎え、今後、「震災を知らない子どもたち」の教育を行うにあたって、私は、「ふくしま道徳教育資料集」を用いた「ふくしまならではの道徳教育」が、改めて大切になってくるのではないかと考えます。

3 大熊町を知ること

令和元年11月28日。私たち北会津支会は、「大熊町視察」を行いました。（大熊町役場、中間貯蔵工事情報センター、福島給食センター、大熊食堂）

ご存じのとおり、大熊町は震災後、会津若松市等で町民の方々が避難生活をされ、現在も大野小、熊町小、大熊中が会津若松市において教育活動を行っています。

私たちは、常日頃から大熊町の三つの小中学校の児童生徒やご家族の方々と接する機会があります。彼らの郷土である大熊町について知り、様々な場面における関わりの中でいかに共感的な思いで接していけるかが求められています。

視察では、大熊町の風景や復興に向けた町の取組、中間貯蔵施設の状況などを目の当たりにしました。

和やかなムードだったバスの車内は、大熊町に入ったとたんに静まりかえりました。次々に目に飛び込んでくる町の風景をそれぞれがだまって見つめる時間が、長い間続いたのが印象的でした。

震災や原発事故でどんなことが起きたのか、そして今どんな状況であるのか、復興に向けた町の思いや努力……。それらをしっかりと踏まえてふくしまの子どもたちの教育にあたっていかなければ、

と改めて強く考えさせられました。

4 むすびに

震災及び原発事故から9年が過ぎ、それに対する意識や関心の薄れがニュース等で取り上げられています。

震災及び原発事故からの復興に向けて努力を積み重ねている立場から見ると、残念な気持ちが込み上げてきます。

震災10年目。「震災を知らない」あるいは「関心が低い」子どもたちに、震災や原発事故を踏まえた教育をいかに行っていくか。今後、私たちが行う教育に求められる視点の一つではないでしょうか。

「震災から10年目を迎えて思うこと」

喜多方市立堂島小学校 校長 半谷 成満

東日本大震災から早いもので、10年目を迎える。その間、私は5つの職場に勤務してきた。震災前まで20年以上小学校の教員として勤務していたので、「今さら」他の職場に移ることはとても不安であったが、今思い出してみると、私の人生の中でプラスになることがたくさんあったように感じている。ここでは、それぞれの職場で得たもの、感じたこと等について改めて振り返ってみたいと思う。

一つ目の職場は、「猪苗代町教育委員会」だった。平成23年の5月の連休明けから7月までお世話になった。震災後私たち家族は、知り合いの紹介で猪苗代町に住むことになっていた。当時、双葉郡浪江町立津島小学校の教頭だった私は、浪江町から会津地方に避難し各地の小学校に区域外就学したり転校したりした子どもたちや兼務でそれぞれの学校に勤務していた教員たちを訪ねて、「現状を把握し何かできることを支援する」という役割を担っていた。実際には、浪江町で把握していた名簿をもとにして、関係の各小中学校にアポイントを取り面談に伺うというスタイルで実施した。訪問しての感想は、どの学校でも避難者に寄り添いながら様々な支援をしてくださっていることや、兼務の教員に対しても最大限の配慮をしてくださっていることを感じて、とてもありがたく安心した気持ちになったのを覚えている。

二つ目は、「福島県教育庁社会教育課」だった。平成23年8月から平成24年3月まで8ヶ月の勤務だった。震災直前に相馬海浜自然の家に内示が出ていたこともあってか、私はそこで福島県の子どもの体験活動を支援するための「ふくしまっ子体験活動応援事業」を推進する役割を仰せつかった。実際の業務内容は、県内の各旅行者から提出されるふくしまっ子関連の書類を審査するというものだった。始まった当初は混乱の極みであったが、徐々にシステム化されていった。そんな中、特に私は旅行者からの「クレーム対応」に追われる日々を過ごすことになった。しかし、それまであまり経験したことのない電話での対応は、その後の職場でも生かされることになった。また、子どもたちと直接には一切関わらない行政の仕事を初めて経験したことも今となっては貴重な経験になったと思っている。

三つ目は、「福島県会津自然の家」だった。平成24年4月から平成28年3月まで4年間の勤務だった。教頭職2年目の時に社会教育主事の資格を取らせていただいていたので、それを生かせる職場だった。ここでは「利用される団体に寄り添い、利用者の立場にたった対応」というものを学んだ。また、利用される各学校を第三者の目線で見させていただいたことも、私にとって貴重な経験となった。さらに、時々偶然にも県内各地に散らばっている前任校に在籍していた子どもたちや、知り合いの先生方にお会いする機会があったことは、お互いに無事を確認し合い、懐かしさと共に大きな喜びであった。

四つ目は、「福島県企画調整部文化スポーツ局生涯学習課」だった。平成28年4月から平成30年3月まで2年間の勤務だった。県庁の勤務は2回目であったが、前回とは違って同じ職場に教員経験者はもう一人しかおらず、県職員の方々に囲まれて業務を行うことになった。私が担った業務の中心は、「震災の記憶と記録を後世に遺すということで、県が2020年夏頃に双葉町の中野地区に完成を目指している東日本大震災・原子力災害伝承館の中に納めるべき震災関連資料を収集すること」だった。これは、これまでに誰も行ったことがない業務であり、当初途方に暮れたが、様々な方々のご助力で少しずつ軌道にのせることができた。ここでは、教員の世界とはかけ離れた県職員の方々の業務遂行に対する「緻密さや厳しさ」を目の当たりにし、これもまた私にとって貴重な経験だった。

そして、五つ目は、現在の「喜多方市立堂島小学校」だった。平成30年4月、約7年ぶりの学校現場、しかも校長という責任のある立場での赴任となったが、「子どもたちの姿が見え、実際に関わることができる職場」であり、不安よりも期待する気持ちの方が大きかった。小規模校ではあるが、同窓会やPTAの組織がしっかり確立されており、様々な場面において「小学校のためなら」とできる限りの協力を惜しまないその姿にいつも感謝している。お陰様で子どもたちは心も体も健やかに成長している。

この10年を振り返ってみると、正に「渡る世間に鬼はない」ということだったと思う。赴任する各職場には必ず親切にいろいろと業務内容等を伝授してくれる人がいた。また、様々な業務を通じて教育関係者ばかりでなく多方面に繋がりができ、新たに知り合う人が増えたことも私の財産となった。今後も、これらの「人と人との繋がり」を大切に、常に子どもたちの目線で学校経営をしたり、「地域と共にある学校」を少しでも実践したりできる校長になれるようさらに努力していきたい。そして、それらのことが微力かもしれないが福島の復興に確実に繋がるものだと私は確信している。

「東日本大震災から10年目を迎えて」

会津美里町立本郷小学校 校長 高橋 裕昭

東日本大震災から10年目を迎えようとしている今、改めて犠牲になられたみなさまのご冥福と、行方不明の方々の一日も早いご無事の確認をお祈り申し上げます。また、被災された方々や避難を余儀なくされている方々をお見舞い申し上げます。

私は、両沼支会の一員として、「東日本大震災から9年目の今、被災地の現状と復興状況を把握し、今後の学校経営に資する」ことを目的に、令和元年10月31日（木）、東京電力（廃炉資料館、福島第一原子力発電所）並びに富岡町立富岡第一・第二小学校を視察いたしました。ご多用の中、岩崎秀一校長先生、渡邊かおり校長先生はじめ、関係の方々みなさまに御礼申し上げます。

東京電力福島第一原子力発電所では、発電所構内をルートに従ってバスで視察いたしました。廃炉に向けた確実な歩みと、一方で、燃料デブリ等の取り出しの難しさを目の当たりにしました。

富岡第一・第二小学校では同校の実践についてご紹介いただきました。地元で2校が再開されるまでの経緯や現在取り組んでいる実践（テレビ会議システムを使った遠隔授業やコミュニティの拠点となる学校づくり等）をスライドショーで視聴し、子どもたち一人一人の笑顔がとても印象に残りました。そして、「中学校卒業時点で、他者に科学的な根拠を基に情報発信できる力を身に付けさせる」という言葉が強く心に残りました。

新学習指導要領の総則では、「前略～、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、～後略」とあります。まさに、目の前の子どもたちが、将来福島を離れて、国内や世界で活躍する時に、誇りをもって「ふくしま」を語り、自信をもって道を切り開いていく資質・能力の育成が大切だと思いました。

本校の教育目標は、「笑顔と夢にあふれる本郷小学校」です。子どもたちの将来の「笑顔」や「夢」のために、今私が目の前の子どもたちにすることは、放射線教育を一層充実させることと、郷土を愛する心を育てることだと、心新たにいたしました。

廃炉まで30年とも40年とも言われています。現在の小学生は、まさに社会を担う主役となっています。奇しくも今年度のノーベル化学賞受賞の吉野彰さんは企業研究者です。東日本大震災、原発事故を経験した（している）「ふくしま」から、将来ノーベル賞受賞の知らせが届くことを願っています。



福島第一原子力発電所にて

南会津町立田島小学校 校長 高橋 弘之

3月11日、私は、県庁西庁舎11階の企画調整部文化スポーツ局生涯学習課に勤務していた。回りのロッカーが次々と倒れ、エレベーターは緊急停止。11階から階段で避難したことを思い出す。外は、雪の舞い散る日だった。次の日から、私は、自治会館に設置された「住民避難班」に配属され、夜8時から朝8時の勤務になった。その時、富岡町のビッグパレット大移動を知ることになる。その後、ビッグパレット、あづま体育館での住民避難のお手伝いをさせて頂いた。あの時こそ、命の大切さを感じたことはない。今も避難されていた皆さんの顔を忘れることができない、辛い記憶です。



避難所となったあづま体育館の様子

南会津町立田島第二小学校 校長 大塚 聖子

2時半に、中学校の制服の採寸のための業者が2名きた。そして、その時がきた。職員室にあった各携帯電話が一斉にけたたましく鳴り響いた。1階にいる1・2年生。担任がいる。3年生以上は2階。5・6年担任は休暇。3・4年担任とともに全員で鼓笛の練習中。子どもたちのところへ階段を駆け上がる。すでに全員が「落ちてこない・倒れてこない・動いてこない」安全な場所で身を潜めていた。しかし、すぐに収まるはずの地震が収まらない。「大丈夫。もうすぐ地震は終わる。大丈夫。まだ、このまま。」と声をかける。「絶対に、この子たちの命は守る。」という強い思いだけだった。

南会津町立桧沢小学校 校長 酒井 央

被害に遭われた方の言葉。「3月11日を忘れないようにしよう、ということはよく言われます。しかしその日は、忘れないようにする日ではなく、忘れられない日です。忘れたいの忘れられない日が3月11日です。いちばん忘れちゃいけないのは、なんてことない、ほんとうになんでもない日々です。幸せだったはずの、前の日なんじゃないかと思えます。」

生きているということ、今を生きているということは、家族がいること、友だちがいること、ご飯を食べること、学校に行くこと、遊ぶこと、何かを頑張ること、泣いたり笑ったりできること……。

3.11は、日々の「当たり前」の幸せを大切にすることを確かめる日にしたいと思えます。

南会津町立荒海小学校 校長 白井 秀行

その日、その時は三島小にいました。今まで経験したことがない地震に驚き、揺れが収まってからは子どもたちを安全に親元へ帰すことに専念していました。一息つけた頃テレビをつけると、これが現実なのかという映像を見て驚愕し、次の日からは被害の少なかった我が家にも、ガソリン、物品不足など影響が出てきたことを思い出します。その後、異動で学校が変わるごとに、津波や原発事故で避難した方の話や除染作業の様子から、まだまだ私の知らないことが多いことを感じました。学校現場では常に災害に対しての最善の正しい判断が求められます。これからも震災で学んだこと・語り継ぐことを大切にしながら、児童の安全・安心を守れる学校を目指していきます。

南会津町立館岩小学校 校長 和田 裕二

「その時」、3階の廊下に子どもたちといた。「すぐ収まる」と思っていたが、揺れは収まるどころか大きくなる。揺れている時間がとても長く感じられた。校舎がくずれるかも…。子どもたちも私も、死んでしまうかもしれない…と思った。揺れが小さくなった時に、身一つで急いで校庭に避難させた。停電により電話が不通の中、教師が付き添い子どもたちを下校させた。

この体験の中で、様々な判断、それも瞬間的にしなければならない場面が数多くあった。何よりも大事な子どもたちの命を守るため、最善の方法を探りながらの瞬間判断の連続。一つ一つの判断が正しかったのかどうか…今でも自問自答する毎日である。

檜枝岐村立檜枝岐小学校 校長 鈴木 路人

地震が頻繁にあると3.11を思い出します。海を挟んだ海外で地震による被害や影響があると3.11を思い出します。自然災害はいつ、どんな時に起こるのか分かりません。3.11は、みんながパニックでした。

そんな中、咄嗟の助け合いや励まし合いが、心の支えとなりました。大震災から約9年の歳月が過ぎ、あらためて人の繋がりのすばらしさを実感しています。日頃からの人の繋がりを意識したコミュニケーションの大切さや協力し合う組織としての取組から生まれる絆の大切さを伝えられるよう、校長としての人間力を高められるよう精進したいと思います。

只見町立只見小学校 校長 吉野 徹

巨大地震・津波による原発事故。連日流れる緊迫したニュース。物流が止まり、燃料や物資がなくなっていく。昼夜を問わずおそってくる余震。誰もが不安な日々を過ごしているとき、体調不良や家事都合で欠席する子どもが出てきた。欠席理由は、「風邪がみで」、「ちょっと家庭の事情で」、「〇〇県の家内の親の体調が悪いので」、「食材が手に入らないので、子どもたちを南会津の家で生活させます」など。本当の理由が、原発事故による避難だろうと思っても、表だって口にはしない。教職員の間でも不安が広がる。「原発、本当に大丈夫ですか。」ぼつんぼつんと空席のある教室。不安と疑心暗鬼の学校生活。大人だけでなく、子ども同士の関係までも、ぎくしゃくする雰囲気。もう二度とそんな経験はしたくない。

只見町立朝日小学校 校長 米畑 健一

以前勤務した学校で、当時の校長が全校集会の講話で、浪江町から埼玉県ふじみ野市に避難した小学4年生の女の子が書いた作文「おにぎりとおみそしる」を紹介しました。震災後のつらさとそこから得た教訓が、小学生目線で克明に描かれており、心に染みしました。震災から月日が経ち、小学生の半数以上にとっては、生まれる前の出来事になりました。様々な工夫をし、この教訓をしっかりと伝えていくことは、私たち福島県の教員の大きな責務なのだと思います。

南会津町立伊南小学校 校長 中目 雅彦

東日本大震災当時、県北地方の教頭だった私は、子どもや教職員の安全確保のため日々奔走していたのを思い出します。単身赴任先のアパートは、全半壊の張り紙が貼られて部屋には入れず、車中泊生活を3週間程していました。そんな中、原子炉のメルトダウン・メルトスルーの情報が入り、PTA役員の皆様と相談の上、放射線測定器を購入していただきました。学校の敷地内はもちろん、通学路の放射線測定を行いました。郡山市の先進的な表土除去や水による除染作業を知り、PTAの皆様や敬老会、地区会長会の皆様の御協力を得て、校舎敷地内や通学路の除染をしました。放射線教育を正しく行うことが、福島に生きる子どもたちにとって必要不可欠なことだと強く感じ、現在に至っております。

下郷町立江川小学校 校長 川村 雅茂

震災から2年後、埼玉に全町避難していた双葉中学校へ異動となった。双葉町の50名以上の児童生

徒が、加須市の騎西小・中の学級に振り分けられて地元の子どもたちと共に学校生活を送っていた。私も騎西中の3年担任として勤務（併任）した。生徒は避難者として生活していたが、心配していた悪質ないじめなどは皆無であり、温かい支援の中、同じ中学生として勉強し、部活動を行い、明るい学校生活を送っていた。埼玉の先生方も生徒を分け隔てなく、厳しくそして温かく育ててくれていた。子どもたち、保護者の方と話をする多くの場で、人の温かさ、つながりを強く感じると皆が感謝の言葉を口にした。学校の再開等、課題山積の中、人の心の温かさを強く感じた。

下郷町立旭田小学校 校長 大桃 豊

震災後に避難所でインタビューを受けた小学校高学年のある女の子の言葉が今も心に残っている。「おいしいご飯を食べて、温かいお風呂に入り、ふかふかの布団で寝る、そういう普段の生活が本当はどれだけ幸せなことだったか今気付かされた・・・」大きく澄んだ瞳を見開いて、興奮した様子で彼女はカメラに向かってそう語った。子どもは子どもなりに、大人は大人なりに、国が、町が、あの震災から多くのことを学び、新たな価値観を抱いた。悲劇と挫折の代償としてもたらされたもの。私たち教員は何を学び、未来に向けてどんな一歩を踏み出せばよいのか、その責任と担った役割は大きい。

忘れないこと、そして問い続けること。

只見町立明和小学校 校長 穴澤 正志

これまで私たちの祖先は、津波、地震、洪水等様々な災害を体験してきた。その度に人々は災害について語り継ぐ必要性を感じ、悲惨な経験を話したり、石碑を建立したり、地名として残したりと何らかの形で後世に語り継ごうとしてきた。

しかし、残念ながら「人間は忘れる生き物」、当時の高い防災意識をつなぎ止めておくことは困難である。そのため同じ後悔を繰り返すという悲劇に見舞われることになる。しかし、防災意識を人の心の中に留めておくことができる手段があるとしたら、それは「教育」であろう。教育こそが災害の忘却を防ぐことができる唯一の鍵である。

私たち教育に携わるものには、防災に対し真摯に向き合わなければならない使命があると考えている。

（校長より教職員へ、職員会議にて）

「未来の命を守ること」

南相馬市立太田小学校 校長 高田 昌幸

平成23年3月11日、私は南相馬市小高区の小学校で東日本大震災を体験しました。経験したことのないような強い地震によって、プールから水があふれ出し、山の木々が狂ったように揺れ、駐車場の車がバンバンと飛び上がる中で、校舎の倒壊も懸念されるほどでした。児童を何とか家族に引き渡して帰宅し、翌朝、沿岸部を見に行ったときに巨大津波の被害を目の当たりにします。海岸の松林は跡形もなくなり、干拓によって拓かれた水田が昔のように湖沼に変わり、至る所に住宅の瓦礫が散乱していました。12日には福島第一原子力発電所1号機が水素爆発し、14日に3号機も爆発するに至って多くの市民が避難を始め、南相馬市は混乱を極めました。自分自身も新潟県に避難、南相馬市からの帰還命令により3月28日に原町区内の学校に戻りました。この時、前任校で教えた子どもたち、卒業生を含む約20名が津波の犠牲となったことを知りました。小学生の多くは迎えに来た家族と一緒に自宅に戻ったために津波に遭い、帰らぬ人となりました。学校にいれば死なずに済んだのです。また、卒業生の多くも、自宅が心配で帰宅する途中で津波に遭い、車内で非業の死を遂げました。私自身、リアス式海岸と違い砂浜には大きな津波は来ないと思い込んでいました。今までの教え子たちに、津波が来たときにどう行動すれば良いか教えてこなかったことが悔やまれます。震災から9年経って、今の小・中学生は震災後の生まれだったり、当時の記憶がなかったりする子どもが大半です。震災が過去のことになりつつある今こそ、学校が防災教育をしっかりと行い、この教訓を引き継いでいかなければなりません。

東京大学大学院情報学環特任教授 片田敏孝氏の「人が死なない防災」という本があります。片田先生は、「釜石の奇跡」と呼ばれる防災教育を推進した方ですが、この中の三つの原則「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」は、私たち教員にとって珠玉の言葉と言えます。また、相双地方にも「請戸小の奇跡」「真野小の奇跡」があります。当時の先生方の英断が、多くの子どもの命を救いました。私たち震災を経験した教員が、この事実を今の子どもたちに語り継いでいくことで、子どもたちが親になって子を守り、老いては地域を守ってくれるのです。10年先、20年先の「未来の命」を守るために、東日本大震災を経験した自分たちが、震災の語り部として事実を伝え、防災教育をしっかりと行うことが何よりも大切であり、教え子たちの尊い命を無駄にしないことだと自分に言い聞かせています。

「感謝そして改めて思う」

新地町立駒ヶ嶺小学校 校長 遠藤 和宏

東日本大震災当日、私は浜通りの正反対、南会津にいました。長い長い揺れがおさまりに、校舎を見回りましたが、特に何の被害もなく、図書室の本さえ1冊も倒れていませんでした。「気を付けて帰れよ～！」といつも通りに子どもたちを見送った私たちは、職員室のテレビでまさかの映像を見ることになります。それはまさしく「津波」の映像でした・・・・・・。

そんな私が、浜通りの学校に赴任しました。国道には「ここまで浸水区域」という看板が見られます。新地町の防災マップには浸水区域が表示され、火力発電所の建物が津波を食い止めたという話も聞きます。福島県で最も古い学校「観海堂」が津波で流失したことも知りました。校長のデータファイルには、地震後の対応の様子を詳細に記した記録があります。相馬地方はさぞかし大変だったのだろうと推測できます。このとき、学校を守るために必死で頑張っておられた校長先生をはじめ先生方には、感謝しないではられません。その先生方のご苦勞があったからこそ、私はここで仕事ができているのですから。そして、「相馬地方の子どもたちのために頑張ろう！」と改めて思うのです。

「あの日」

相馬市立八幡小学校 教諭 大槻 達也

娘の通っていた学校は、津波の被害に遭いました。校庭に避難していた子どもたち。子どもを迎えに来たおじいさんが、「こんなところではだめだ。高台に逃げなくちゃだめだ。」と校長先生に訴えたそうです。校長先生の判断で、先生方の車、迎えに来ていた保護者の車に分乗し、高台へ避難し、難を逃れることができました。一人の親として、子どもの命を守ってくれた先生方、保護者の方に感謝の言葉しかありません。

震災当日の夜から3日間、避難所での生活が続きました。避難所は電気が通っていましたが、断水で、トイレは不便な状態でした。食事は、おにぎりやカレーなど、ボランティアの方が炊き出しを行ってくれました。ニュースなどで見ていた避難所での生活が、自分の身に起こるとは思ってもみませんでした。「あたりまえ」が「あたりまえではない」生活の中で、「あたりまえ」のありがたさを初めて感じることができました。

「放射線被害から学び 伝えたいこと」

飯館村立草野小学校 教頭 烏中 雪野

東日本大震災後の原子力発電所の事故により、当時勤務していた小学校は、「緊急時避難準備区域」に指定され、6つの学校が30km圏外の避難先の学校にスクールバスで通ったことが昨日のようだ。6つの小学校が1か所に集まったため、校内は混みあった状態。放射線を考えて、窓は絶対に開けてはならず、マスクを着用しての生活が続いた。夏の暑さに耐える毎日。初めての給食は、おにぎり2個とヨーグルト1個。決して多いとは言えないが、感謝の気持ちで食べたことが懐かしい。半年後に避難指示が解除され、1月に自分の学校に戻る時、ともに頑張った小学生や他の教職員の方々へ涙を流して別れたことを今でも忘れられない。

その後、そんな私が教頭として赴任したのは飯館村立草野小学校。全村避難を余儀なくされた村の小学校。草野小学校・飯樋小学校・白石小学校の3つの小学校が隣町の川俣町に建てられた仮設校舎での生活をしてきた。当時の仮設校舎は、2階を歩くと歩く音が聞こえ、教室の声すら下に聞こえる環境。手狭で校庭も狭く、50mを直線とるのがやっとだった。決して良い教育環境とはいえなかった。



三つの小学校が通った仮設校舎

しかしながら、そこで生活する子どもたちは未来をみつめていた。朝1時間かけてスクールバスで登校し、元気に学校生活を送り、1時間かけて下校する毎日の中で、一人一人が学びの連続性を展開し、未来を切り拓く力を育てていたのだ。

中でも特に目を見張ったのが、県内に先駆けての放射線教育。子どもたちが科学的根拠をもとに客観的立場から放射線をどうとらえ、判断し、行動していくのか、その力を育てる授業があった。全学年が飯館村の現状を基盤として、福島県の状況と向き合いながら、どう未来を切り拓いていくのか、その力を身に付けることができた子どもたちであった。

次に感動したことは、たくさんの支援と心遣い。当時の天皇陛下と皇后陛下の御行啓をはじめ、日本各地と全世界からの支援。震災後、9年が経とうとしているが、まだ子どもたちを忘れずに支援と交流を続けてくれていることに感謝する毎日である。

そして川俣町の支援。仮設校舎で不十分な教育環境を川俣町の人々が支えてくれた。児童同士の交流、プールの借用等。川俣町立飯坂小学校のプールの使用を承諾いただき、夏の水泳活動をすすめることができた。川俣町最大のイベント「コスキンパレード」に全児童で参加し、交流できたことは大切な思い出のひとつである。



子どもたちを元気づけようと飾ったこいのぼり

さらにはPTAの支援。夏のいいたてっ子夏祭り。PTAの役員が「何年も避難生活をしている子どもたちに元気になってもらいたい。」と夏休み期間中に流しそうめん・ゲーム等、たくさんの思い出に残るイベントを作ってくれたことだ。

平成30年。本村での学校再開。開校式で代表児童の言葉に「今まで支えていただいた人々に感謝するとともに、校庭で思いっきり大きな声を出してみたい。」という気持ちに感動した。今、恵まれた教育環境のもとで、子どもたちはよりよい未来を自分たちの力で創り上げようとしている。



2018. 新校舎で学校再開

飯館村の子どもたちは、全国・全世界に向けて、自分たちが学んだこと・体験したことについて発信している。

- オリンピック500日前プロジェクトでの発信
- 渋谷公園通り花フェスティバルでの発信

飯舘村の未来・福島のために、自分たちはどうあるべきかを考え、行動を始めている。私はそんな子どもたちと関わりながら、過去の経験を生かして未来を切り拓く力を育てていくことが本当に大事であるとする毎日である。教頭として地域とともに子どもたちの頑張りを応援していきたい。

葛尾村立葛尾小学校 校長 遠藤 裕一

あきらめないことと、感謝の気持ちを持つことの大切さを改めて痛感した。

双葉町立双葉北小学校 校長 松本 美穂子

常日頃から対策を考えておくことこそが、災害に対する最大の備えである。(避難訓練・教師や家族との話し合いなど)

家や学校の近所の方との絆づくりが命を救う。日頃のあいさつを大切にしたい。

双葉町立双葉南小学校 校長 泉田 淳

校長は、ハザードマップや過去の被災の歴史・地勢等をよく理解し、市町村及び自校の防災計画を確実に理解していなければならない。いざ発災の際には、適切な判断を、勇気を持って瞬時に下す責任がある。常日頃からその覚悟を忘れてはならない。(東日本大震災発災時、「国道6号線より海側の地域の子は保護者にも引き渡すな。ここが、津波からの避難箇所だ。」と第1避難所である校庭に児童を迎えに来た保護者に向かって、大声で何度も呼び掛けるように、教頭であった私に的確に指示した当時の大甕小学校長平間勝成先生への尊敬の気持ち。津波に殉じた方々への慰霊の心を込めて。合掌。)

「哺乳瓶を貸してください。」(震災当日、避難所になった学校の体育館で若いお母さんから言われた一言。哺乳瓶どころか、水も、食料も、毛布も何もなく、停電で電灯もストーブさえも使えない、真っ暗でひたすら寒い、名ばかりの「避難所」だった。しっかり備えなければならない。)

「お父さんもお母さんも学校で子どもたちを守らなくてはならないから、すぐに迎えに来てはもらえないと覚悟していたよ。」(深夜になって避難所でやっと会えた息子に言われた一言。申し訳なさも感じたが、それ以上に、いつまでも子どもだと思っていた息子の成長と頼もしさを実感できた。)

「頑張っているよ。もちろん。」(震災直後の混乱の中、私がかけた「頑張りましょう。」に対して決然として答えた保護者の勇気に満ちた一言。)

「大丈夫かい。困ったことがあったら何でも言ってね。」(大学時代の友人からいち早くかかってきた電話で人の心の温かさを感じた一言。)

「いつでも帰っておいで。ここがあなたの家なんだから。」(避難先を求めて彷徨っていた私にかかってきた、家族や親戚のつながりの強さを感じた義姉からの電話の声。)

「こんなに贅沢なもの、食べていいの？」(避難先を探して彷徨っていた時、疲れて入った牛井屋で、何の変哲もない牛井並を前にして息子が言った一言。一瞬にして避難民に変わる可能性がある。)

「ゴミ箱、注文を受けた数だけ全部納入したのでしょうか。」(原発が水素爆発し、今まさに教頭も避難しようとした時、学校にかかってきた納入業者の女性の一言。こんな時にさえ、正直に誠実に職務を全うしようとする日本人の凄さを感じた。)

「東日本大震災の被災者の皆様に募金をお願いします。」(避難先で立ち寄ったショッピングモールで聞いた募金活動をしていた男子高校生の腹の底から響くような声。日本という国の未来と日本の若者を信じ、感謝した。勇気を奮い立たせてくれた一言。)

「福島県の私の息子が、将来、もし、皆さんの娘さんに結婚を申し込んだとしたら、(放射線被曝が心配だからと)決して反対しないでください。それが、人権教育です。」(埼玉県の人権教育集会において、福島県の児童がおかれている状況を発表した際に、数百人の参加者に向けて私が訴えた一言。)

「『復興』とは、双葉に笑顔が戻ることです。」(テレビ局のインタビュアーから「復興とは何か。」と問われ、児童が発した一言。)

「今度はぼくたちの番。」(西日本豪雨に際して募金活動を提案するに当たって、児童が壁新聞に記した言葉。)

「君たちには、地震と津波と原発事故を乗り越えてきた強さがある。全国の人々から応援してもらったことに対する感謝の気持ちも忘れないでね。」(Y氏が子どもたちに語りかけた言葉)

「前を向いて歩こうよ。涙がこぼれたっていいじゃないか。(中略)一人ぼっちじゃない。」(復興祈念コンサートで双子デュオが「上を向いて歩こう」の替え歌の歌詞。思わず涙がこぼれました。)

月並みだが、日常や普通、当たり前のことこそが、有り得ないほど「有り難い」(そうあることが奇跡であるほど不思議な)ことであるということを思い知らされた。普通に感謝。日常を大切に。

「真実は、いつも、一つ。」ではない。「真実は、いつも、一人一つずつある。」(被災、避難の混乱した状況においては、一人一人が体験したこと、見たこと、聞いたこと、したこと、話したことの全てが真実である。)

「思いやる気持ちに支えられて～おにぎりと軍手～」 いわき市立江名小学校 校長 小野 信尚

震災当時、私はいわき市立勿来第二小学校に教頭として勤務していた。勿来二小は、いわき市の南部、茨城県との県境に位置している。海拔は5メートル、海までは直線で約400メートルである。

大地震は、集団下校後に発生した。これまで、経験したことのない揺れが長い時間続いた。地震直後から、学校へ続々と地区民が避難してきた。勿来二小は海拔5メートル、海も近い。津波対応の避難所としては成立しない。避難してくる皆さんを高台の中学校へと誘導した。それだけで、精一杯だった。続々と避難してくる人たち、対応に追われる職員、ちらつく雪、あつという間に日が暮れていった。降り続く雪と寒さと夕闇と・・・、学校に避難させてほしいという高齢者や地区民の声に、泣く泣く学校への避難を受け入れた。少しでも高さのある3階の教室を避難所として提供した。午後8時頃、ようやく避難者が落ち着いたところで校地内の安全確認を行った。校地東側プールの縁まで津波が押し寄せているのには愕然とした。その後も強い余震が何度も続く中で、職員室でなんとも言えない不安な一夜を明かした。そんな中、翌朝に起きた2つの出来事を今でも鮮明に覚えている。

一つ目は、学校の近所の皆さんが協力して、温かいおにぎりを学校に届けてくださったことである。自分たちだって困っていたはずなのに、「学校に避難している人たちが困っているだろう。」「お腹を空かせているだろう。」と心配してくださったのである。昨晚から、わずかな乾パンしか口に入れていなかった皆さんが配られたおにぎりを大事そうに食べる姿が忘れられない。二つ目は、灯油を届けにきた給油所の若者の対応だった。私が、寒さの中で素手で灯油のタンクを運んでいる姿を見て、「寝てらっしゃらないんでしょう。大丈夫ですか。」「この軍手を使ってください。」と声をかけて、真新しい軍手を私に差し出した。先の見えない夜を過ごした私にとって、近所の皆さんや若者の言葉は大きな励みとなった。この時もらった軍手は今でも私の宝物になっている。

これからの人生も予期せぬ事態が身に降りかかってくるのが十分予想される。そんな時、私自身も震災の時の近所の皆さんや灯油を届けてくれた若者のように、人を思いやる気持ちをもって行動できる人でありたい。人を思いやる気持ちは、人を動かす大きな力になることを信じて。

「東日本大震災を忘れない」 いわき市立菊田小学校 校長 大槻 貴

当時、私はいわき市内の小学校で唯一、校舎に直接津波の被害を受けた永崎小学校の教頭をしていました。地震の揺れは大きく、職員室にいても、立っていただけませんでした。児童はすでに下校してしましました。揺れが収まると、校舎内にいる先生方や児童クラブの児童らと約1km離れた校舎裏側高台にある公園に避難しました。その時に真っ白な雪が降ってきたので集会所に入らせていただき、そのまま避難所として先生方や一緒に避難してきた児童、学校のご近所の方々等と眠れぬ夜を過ごしました。

夜明けすぐ、学校へ行きました。学校は泥をかぶった極端に言えば土色一色でした。校舎1階は何度も津波が押し寄せたことが一目で分かるような泥の横線が窓や壁に何本も残っていました。机や椅子は泥や土にまみれ、漂流物等が散乱し、教室や体育館の床ははがれめくれ上がっていました。体育館のピアノは泥まみれで全く別な場所にありました。教職員の車は何台も津波に流され、数台は体育館の出入口に詰め込まれたようになっていて、何故かその車のクラクションがピーーと荒涼の校庭に鳴り響いていました。この状況を目の前にして、これからどうしたらいいのかすぐにはわかりませんでした。

4月になり被災した学校が合同で入学式を市文化センターで行い、第1学期始業式も行いました。校舎は使えないため、近隣の江名小の校舎を間借りして学校生活が始まりました。江名小の先生方や児童までもが親切にしてくれました。また、多くの方が児童を激励にいらしたり、支援物資を送ってくださった等、ありがたさが身にしみました。市教委や事務所等の関係機関からも様々なご支援とご指導をいただきながら毎日を過ごしました。8月に校長先生が替わりましたが、どちらの校長先生からも学校のために強い信念を持って学校経営にあたる大切さを教えていただきました。また、この時期を一緒に過ごした先生方(江名小の先生方も)の献身的な努力も忘れられませんし、忘れてはいけないと思っています。1年後の3月の土曜日、卒業式前に元の校舎に引っ越しました。3月という忙しい中にもかかわらず、市内の先生方はじめ、いろいろな方々が引っ越しの手伝いに来てくれました。涙が出るほど感激しました。ここに書ききれなかった方も含めて多くの方のご理解やご尽力があったからこそ今の自分

があると、事あるごとに思い出し、奮起し、微力ながら校長職に励んでいるところです。

「油断大敵」

いわき市立上遠野小学校 校長 大沼 廣記

あの「3・11」から9年と8カ月が経過しようとしている。自分の中ではあの津波で児童2名の尊い命を失ったこともあり、(忘れないせいか)記憶が曖昧になっている部分もあるがこれからの人々のために何かしら参考になることを記録できれば、と思い至り、記憶を呼び起こしてみることにした。

肝に銘ずべきことは「油断大敵」という昔からの格言である。「3・11」からさかのぼること約1年、2010年2月27日に南米チリで大地震が発生し、日本の太平洋沿岸部にも津波警報(所によっては大津波警報)が発令された。当時いわき市立豊間小学校教頭として勤務していた私は「1960年のチリ地震による津波が再現されたら大変だ」という思いで週休日に学校へ詰めていた。テレビでは太平洋沿岸の各地の漁港等の様子がライブで流されている。「小名浜港への津波到着は〇時〇分!」という時間に私の緊張はピークに達したが、テレビに映った小名浜港は、それは静かなものだった。その時、私の脳裏には「地震による津波は万一発生してもたいしたことはない」ということが刷りこまれてしまった。

そして3月11日、児童たちが一斉下校で校門を出て少し進んだとき、あの大地震が発生した。もう一人の職員と共に約20名ほどの児童たちに追いついた私は「早く子どもたちを家庭まで送らなければ……」という考えしかもてずに、繰り返し起きる余震におびえながら学校からどんどん離れていった。14時55分頃、職員が車で我々に追いつき「津波が来ます!」と伝えてくれた。正に天からの声であった。

「そうだ、地震が起きれば津波が来るかもしれない!」と気づき、急いで学校へ引き返して事なきを得た。あのまま進んでいけば、間違いなく15時10分発生の大津波にさらわれていたであろう。

ちなみに豊間・薄磯地区でお亡くなりになった多くの方々も「津波なんか絶対にこない。くるわけがない。」と言っていた方が多いと聞いた。そう、油断大敵。地震の後は津波に備えるべきである。

また「てんでんこ」も極めて重要な考え方である。命に危険が差し迫っているとき、最終的に頼りにできるのは「自分自身の判断」である。この「てんでんこ」の考えが徹底できていれば、2名の児童も助かっていたかもしれない。今回「3・11」を振り返ってみて、有事の際どんな行動をとるべきか正しく判断する力を身につけさせていくことが我々教員の大きな使命の一つだという思いを新たにしました。

子どもたちへ

『釜石の奇跡』に学ぶ

伊達市立柱沢小学校 校長 熊坂 吉徳

東日本大震災時における「釜石の奇跡」に多くのことを学びました。毎年の避難訓練「釜石の奇跡」を参考に、次のことを話しています。

- 1 常に真剣に取り組むこと
- 2 普段の生活に一生懸命取り組むことの大切さ
- 3 冷静にそして周囲の状況を確認しながら避難することの大切さ

過去の事例に学び、子どもたちが一番大切な命を自ら守ることができるよう指導していきます。

「災害に対する正しい知識を」

伊達市立栗野小学校 教諭 志賀 千紘

私は中学生の時に原発事故が起きました。その時は、放射線とは何かをよく知りませんでした。この経験から、正しい知識を持ち、適切に判断・行動することが自らの命を守ることであることを知りました。私は、今教員となり、子どもたちに、災害に対する正しい知識を伝え自ら判断する大切さを伝えていかなければならないと心に誓っています。

「私の使命」

伊達市立掛田小学校 教諭 加藤 佐和子

2011年3月11日、私は高校1年生だった。海が自慢の町は津波で全く違う景色になり、友人の家も流され、災害の恐ろしさをあのとき初めて体感した。教師になり、震災を知らない子どもたちに災害の恐ろしさ、命を守る方法をきちんと伝えていくことが教師としての自分の使命だと思う。「ここは大丈夫」はない。万が一を想定した早めの行動で、大切な自分の命を守れる人になってほしい。

「避難訓練は大切な行事」

伊達市立小国小学校 教諭 内藤 雄一

あの日、3年生だったM君は下校途中でした。M君の前後を1・2年生も歩いていました。ものすごい揺れ! 「田んぼに逃げるよ!」

とっさに M 君は近くにいた下級生に叫びました。数十分後、田んぼの真ん中で身を寄せ合うようにしていた M 君と数名は、近くのおとなの人に助けられました。避難訓練でいつも校庭の真ん中に逃げていた経験が生きた瞬間でした。避難訓練は大事。真剣に取り組みましょう。

大玉村立玉井小学校 教頭 鈴木 浩記

一人一人の命には意味があり、生かされているもの。命あることに感謝し、自分らしく、精一杯生きる。

「目の前にいる子どもたちへ」

桑折町立睦合小学校 教諭 高見 瑞子

目の前にいる子どもたちは、東日本大震災を全く知りません。震災の恐ろしさ、震災によって家族や大切な人を亡くした人の悲しみもわかりません。しかし、一緒にいる家族や、いつも当たり前にいる人との別れが突然訪れるのが災害です。災害は防ぐことができません。だから、家族やいつも一緒にいてくれる人を大切にしたいです。今、「普通に生活していることが幸せなんだ。」ということ子どもたちに伝えていきたいと考えています。

二本松市立油井小学校 校長 高橋 健一

正しいことは何なのか。正しい知恵と想像力を身につけよう。だから勉強するのだ。こんな時こそしっかり学ぼう。(当時勤務していた昭和中学校で発行した震災直後の学校だよりの見出しより)

二本松市立安達太良小学校 教頭 渡辺 敏夫

当たり前と思って、何不自由なく生活しているとわからないが、震災でわかった普通に過ごせることのありがたさ。生活を支えてくれている人、物に感謝。

本宮市立本宮小学校 教頭 赤間 聡

人が生きるということは、誰かに借りがあるということ。人が生きるということは、その借りを返しながらか生きていくこと。感謝の気持ちを大切に。

二本松市立塩沢小学校 教諭 杉本 朋子

ふだんの何気ないこと。それらが当たり前でできること。普通に過ごせる毎日が、一番の幸せ。

二本松市立石井小学校 教諭 渡邊 吉隆

計り知れない不安・苦悩の日々から、大いなる希望の光が見えている。苦しいことやつらいことがあればチャンスに変え乗り越えるんだ。支えてくれる周囲に感謝し、未来に向かってより強く高く。

大玉村立大山小学校 教諭 日下部 正和

食べ物を不安なく食べられること。校庭で楽しく元気よく遊べること。あたりまえの毎日に、感謝。

本宮市立岩根小学校 教諭 田河 康秀

食べることができる。布団に寝ることができる。家に帰ることができる。当たり前のことが失われて、初めて、その幸せを知る。

本宮市立糠沢小学校 教諭 藤堂 剛史

震災を経験していなくとも、いざというときの心は忘れるな。常に高いアンテナと確かな情報で自分の命は自分で守る。

「“つながる” おもい～未来を引き寄せる大きな力～」

天栄村立湯本小学校 教諭 星 克明

東日本大震災の年、私は6年生15名の担任をしていました。4月当初は、震災と原発の問題で、檜葉やその近辺の市町村から多くの方々が、学校のある温泉街の旅館や民宿に避難され、先の見えない不安な日々を過ごしていました。私は、避難された方々の、二度と戻ることが叶わないかもしれない故郷への思いにふれるたび、微力ながら何かお手伝いすることができないか、と考えていました。そこで、子どもたちにその思いを伝えました。すると子どもたちは、みんなで千羽鶴や応援メッセージを書き込んだ運動会のお知らせをつくり、それらを手渡しするために、

民宿や旅館、ホテルを歩いて回ってくれたのです。運動会当日、子どもたちの呼びかけに応じてくださった、予想を遙かに超える数の避難された方々が、小学校の校庭に集まりました。そして、あの忘れられない瞬間がやってきます。子どもたちと避難されてきた方々との、一步も引かない本気の綱引き勝負。会場は一気に盛り上がり、子どもたち、避難された方々、その両方に会場から大きな声援が送られました。白熱の引き合い。雌雄が決するピストルの音。なんと、避難された方々が、数的不利をものともせず、前評判を覆し、子どもたちに勝利したのです。その瞬間、会場は割れんばかりの拍手と声援に包まれました。万歳をし、笑顔で喜び抱き合う避難された方々の姿から、会場に居合わせた全員が、特に本気をぶつけ合った子どもたちが、受難を乗り越え、未来を切り拓いていこうとする、避難された方々の力強い意志と勇気、それ以上の熱い何かを感じているように、私には見えたのです。

そんな子どもたちも今年の夏、令和最初の成人式を迎えました。私も当時の担任という肩書で式に同席させていただきました。ところが、空調の不具合で会場が大変暑くなり、汗だくの、ある意味忘れられない成人式となりました。でも私はその時、この暑さは「空調の故障のせいだけではないのでは？」と思ったのです。もしかするとそれは、機能性の高い空調のコントロールさえ及ばない会場の熱気こそ、あの時、子どもたちへ綱伝いに伝わってきた、避難された方々の困難を乗り越え生きていこうとする熱い魂の雄叫びを、今でも身体のだこかに宿し、それが彼らの中で確実に生き続けている証なのではないか、と。成人となった子どもたちの、未来を見据え力強く一步を踏み出す決意を漂わせる凛とした表情は、あの時子どもたちに対峙し、綱を強く握りしめ、競技開始を告げるピストルの合図を待つ避難された方々のそれと、どこかシンクロして見えたのです。果たして、それは、会場の熱気と暑さが私に見せた幻影だったのでしょうか。

南会津町立南郷小学校 校長 湯田 眞佐利

平成31年度、放射線教育・防災教育の実践協力校として実践を積み重ねた。高学年は、子どもたち自身が主体的に放射線について調べる中で、南会津地域も農業や観光業で風評被害の大きな影響を受けたことを知った。地域のゲストティーチャーから、風評被害と必死に戦ってきた話を聞くときの、真剣なまなざしを忘れることはできない。子どもたちはこの時、放射線に関わる様々な課題を克服し、地域の将来を担う人材に育ててほしいという、大人たちの熱い思いも受け取った。この学びを糧に、これからも学び続け、正しい知識を身に付け、自分で考え、判断し、行動できる大人に成長してくれることを願っている。

下郷町立檜原小学校 校長 酒井 健

震災当時、郡山市の小学校で教務主任をしていました。市の判断による臨時休業、予定していた卒業式の可否・会場変更、押し寄せてくる原発事故の避難エリア拡大等、毎日がめまぐるしい日々であったことを思い出します。

新年度になり、郡山市には多くの避難された方々がおりました。そのような中、分科で担当した学年の音楽科の授業で、「ビリーブ」を歌っていた時、ある女の子が、涙目で私にこう言いました。「先生、この歌を避難されているたくさんの人たちの前で歌いたい。この歌で元気づけてあげたい。」自分たちよりも苦しんでいる人のために・・・なんてすてきな言葉なのか、なんて優しい心なのか、私はピアノの前で思わず涙がこぼれました。その子は、現在、高校3年生です。



校庭に埋めていた表土の搬出
(パイロット輸送)の様子

3・11集会、鎮魂の集い等の校長の言葉

「平成30年度 3・11集会挨拶」 前 福島市立野田小学校 校長 佐藤 一男

7年前、大きな地震があって、北側の校舎が壊れてしまいました。

皆さん、この体育館を見てください。7年前、この体育館を3年生と6年生の教室にしていました。

(北)こっち側が6年生5クラス、(南)こっち側、校庭側が3年生5クラスです。白い板をたくさんつないで、仕切りを作って教室にしました。天井はありません、これくらいの高さの仕切りだけです。こっち側の3年生もおんなじです。パネルという板で仕切って、そこに机を運んで、教室にしました。全部で300人くらいが、ここで勉強しました。

さらに、5年生は、野田中学校の空いている教室を借りて勉強しました。みんなとは違う中学校まで行って勉強していました。5年生だけ、離ればなれになって、勉強しなければならなかったのです。そうやって、4月、5月、6月、7月と1学期間勉強しました。

皆さんの、先輩、野田小学校のその頃のお兄さんお姉さんは、そうやって勉強しました。それでも一

生懸命勉強しました。今みたいに、エアコンなんてありません。あったのは扇風機だけです。体育館は本当にうるさいし、暑かったです。でもそういう中でも、皆さんの先輩は一生懸命勉強しました。運動しました。本当によく頑張ったな、立派だなと思います。

負けないぞ、という強い心と、勉強しようという気持ちがあれば、勉強はどこでもできるのです。本がないからとか、パソコンがないからとか、塾に行っていないからとか、一人の勉強部屋がないからとか関係ありません。勉強しようという思いがあれば、勉強はどこでもできます。

さて、先ほど「黙祷」をしました。7年前の地震の時は、その地震ですごく揺れたので、海に大きな波が来て、たくさんの方が、その大きな波にさらわれて、亡くなりました。全部で18,000人くらいの方が亡くなりました。死んでしまったのです。

18,000人って、校長先生も想像できないのですが、野田小学校は748人いるので、その24個分の人です。それくらいたくさんの方が亡くなったのです。亡くなった皆さんは、きっと、もっと運動したり、勉強したり、遊んだり、お話ししたりしたかったと思います。もっとお仕事をしたかったと思います。人の役に立つことをしたかったと思います。でも、なくなってしまいました。

皆さんは、こうして元気に生きています。そのなくなった皆さんの分も、皆さん一生懸命がんばってほしいなと思います。一生懸命勉強しましょう。一生懸命運動しましょう。友達と楽しく遊びましょう。あいさつも返事も元気にやりましょう。いろんな人とおはなししましょう。給食も残さず食べましょう。そして、自分のことだけでなく、人の役に立つこともがんばりましょう。平成30年3月9日

「平成30年度 東日本大震災から7年 亡くなられた方々の御霊に祈り復興、防災を誓う」

福島市立笹谷小学校 校長 福士 久子

7年前、平成23年3月11日、午後2時46分。未だかつて経験したことのない巨大地震が東日本を襲いました。とてつもない津波と引き波が海辺の市や町を飲み込みました。福島第一原子力発電所の水素爆発により、放射能という目に見えない恐怖が、福島県に住む私たちを襲いました。そして、多くの尊い命が奪われました。

残されたのは、深い深い悲しみ。瓦礫。風評の波。放射線量が高く故郷に帰れない帰還困難の無念。避難先でのいじめに苦しむお友達。しかし、今ここにいるのは、確かに生きて前向きに進もうとする私たちです。

あの震災の時、皆さんはどこにいましたか。小雪ちらつく寒い中、家の方が迎えにくるのを、じっと待っていた笹谷小学校の子どもたち。今の6年生は、あの時まだ幼稚園、保育園の年中組でした。あの時、急に大きく右に左にと教室が揺れて、下から突き上げるような縦揺れも起こりました。ものすごい風が吹いているようにも感じました。教室の棚のものが、がらがらと落ちてきたり、机が、あっちこちにと大きく揺れて、立ってはいられませんでした。笹谷小学校の子どもたちは、皆先生の言うとおりの机の下にもぐり、しがみついて揺れの恐怖に耐えていました。先生は、教室の入口の柱につかまって、必死に子どもたちを励ました。

「大丈夫だ、大丈夫だ、慌てるな」と。今もその時の恐怖と驚きを忘れることはできません。

そのあと、雪がちらつく寒い校庭で、お家の方が迎えに来るのを待っていました。待っている間も、幾度となく揺れがおそいました。校舎の窓ガラスや校庭の桜の木々が、ぐらぐらと揺れているのがわかりました。家の前に着いても、怖くて足がすくんで家に入るのが怖かったという人もいました。

6年生のAさんは、あの時まだ5歳。ちょうどあの大地震の時、イオンの駐車場でおばあちゃんの運転する車の中にいたそうです。ぐらぐらと揺れる車の中で、3歳の弟の手をしっかりと握って、揺れに耐えていたとのこと。道路のマンホールからは、水が噴き上げているのも見たそうです。そして、その時、Aさんのお母さんのおなかには赤ちゃんがいました。お母さんは、おなかの赤ちゃんを守って、揺れに耐えていたそうです。その2ヶ月後、無事にAさんの弟が生まれました。無事に生まれて来て本当によかった。命の尊さを改めて実感する話です。

また、6年生のYさんは、あの時、ものすごい揺れに驚き、外に出て庭にしゃがみ込み固まっていたとのこと。何度も地震警報が鳴り響き、寒くて、怖くて、暗かったと語っています。

同じく6年生のHさんは、3月13日が誕生日。しかし、あの時の、誕生日は、お祝いするどころではなく、祝ってもらえないさみしさ切なさだけが、今も心に残っているそうです。

6年のSさんは、浪江町に住んでいました。あの震災の時、大きな揺れに慌てて外へ。地面はひび割れ、何度も何度も揺れが繰り返し起こり、「僕は、死ぬのかな」と思ったそうです。家の中のピアノも冷蔵庫もテレビも、家具も何もかも、ぐちゃぐちゃにたおれ壊れ、足の踏み場もない状態だったとのこと。そして追い打ちをかけるように、原発の爆発事故。Sさん一家は、埼玉県へ会津へと何度も引っ越しを余儀なくされました。

避難解除になったとき、かつての自分の家のある浪江町に戻って見たときのこと。その時、Sさんは、自分の家のあまりの変わりように、愕然としたと語っています。かつての自分の家は、まるで森の中のように、うっそうと木々や雑草が生い茂って、かつての面影は全くなかったそうです。

でも今、ようやくSさん一家は、笹谷に、腰を落ち着かせることができました。Sさんが、こんな風に語ってくれて、力強く前向きに生きていることを感じ、校長先生は、とても嬉しく思いました。

宮城県石巻市立大川小学校。ここは、福島県のお隣の県にある海辺の小学校です。全校生108人中74人、先生方9人が津波の犠牲になるという大きな悲劇を受けた小学校です。一つの学校で失われた命の

多さとして最大の悲劇となってしまった大川小学校。本当に残念でなりません。大きな津波被害を受けた大川小学校の校舎は、震災遺構として残され、後世に語り継がれることとなりました。

1, 2年生は、あの震災の時、まだ1歳2歳の赤ちゃんでしたので、どんなことがおこったのか、よくわからないでしょう。だからこそ、よくきいてください。そして忘れないでいてください。東日本大震災のことを。そしてその後起こった、福島第一原子力発電所の事故のことを。

水もでない、電気もつかない、食料もない、暖房もない、ガソリンもない、壊れた家々、ガラスの破片が飛び散った店。辛かったね。

あの時の6年生たちの卒業式は、ついに、行うことはできませんでした。卒業式の練習は、したのに。心を込めて歌う練習もしたのに。呼びかけのことばにたくさんの思いを込めて、巣立つはずだったのに。卒業証書は、あとで先生方が、一人一人の家々に回って届けました。寂しい卒業でした。

あの時の卒業生は、昨年3月、高校を卒業し、大学や、専門学校等それぞれの自分の道を切り開こうとしています。

そう、忘れてはいけません。覚えておかななくてはなりません。そして、伝えていかななくてはなりません。あの大きな地震があったことを。そしてそれを乗り越えて来た私たちがいることを。

校長先生は、あの震災の映像が流れるたび、語られる手記を読むたびに、今も涙があふれます。いじめなど絶対にあってはならぬことなのですが、福島の子どもということではじめがあったことも事実です。でも、そんないじめや風評被害や苦しいことなど、マイナスのことに立ち向かう強さと勇気を持たなくてはなりません。

あの震災のために亡くなられた方々15, 895人。未だ行方不明の方, 2, 539人。そして今なお避難生活を続けている方々 全国に約12万人。

ちょうど1年前 震災から6年もたつて、ようやく瓦礫と土砂の中から、遺骨が見つかった方がいます。震災当時7歳だった大熊町の女の子です。苦しかったですよ。

あれから7年。復興を力強く心に刻み、一日一日 一年一年、震災以前の生活へと歩み続けてきた私たち。まだまだ時間がかかるかもしれませんが、一步一步震災前の姿に近づいています。

東日本大震災。試練と言うにはあまりにむごい仕打ちであったけれど、福島第一原子力発電所の廃炉には40年。放射能との戦いはこれからも続けけれど、どんな困難にあっても思いやりを忘れず、あるべき姿を失わず、強く生き抜く福島の子どもであること、そして日本人であることに誇りを持ち、しっかりと学び生きてほしいと思います。一日一日を大切に、今やるべきことをしっかりとやり遂げ、学んでほしいと思います。

今こうしていられるのも、震災の時も、またその後もたくさんの方々の支えや励ましがあったからです。これからも感謝の気持ちを忘れずに生活してほしいと思います。そして、友達を思いやり、友達の心の痛みや喜びをいっしょに感じられる優しく強い心を持ってほしいと思います。

あの時の震災を乗り越えられたのだから、少しの苦しみなどなんでもない、と言える明るさをもって過ごしてほしいと思います。

あの時に亡くなられた方々の御霊に祈り、これからの復興と防災を誓い、皆さんの命を精一杯輝かせてください。東日本大震災を乗り越え力強く生きる福島の子どもとして、自信をもって進んでください。

これが 校長先生の最大の願いです。

平成31年3月9日 ※ 東日本大震災3.11を迎え、「全校集会：鎮魂の集い」に寄せて

「記憶をつないで・・・ 仲間として」

田村市立大越小学校 校長 白石 修子

令和2年3月11日で、東日本大震災から10年目を迎えようとしています。現在小学校に通っている子どもたちは、大きな地震があったことも、ご家族や保育園の先生方が命がけで守ってくださったことも記憶にすらないようです。また、同じ市内には過去に避難を余儀なくされた方々はいても、ここ大越地区は大きな被害もなく、避難の必要もなく、ほぼ震災以前の生活にすぐに戻ることができました。

そんな中で成長してきた子どもたちには、未だに避難を強いられて自分の家に戻れずにいる方々がいることを知り、同じ福島県民として何ができるかを考えてほしいと願って、昨年度「防災集会3.11」の中で次のように投げかけてみました。

(前略) 今日で、この大地震から8年が過ぎる。

皆さんの中には、この大震災のことをまだ小さくて、記憶の全くない人もいると思う。また、記憶はあっても月日がたつに従ってぼんやりとしか思い出せない人もいると思う。

しかし、福島に暮らす私たちは、あの日のことを忘れてはいけぬ。知らなければいけない。伝えなければいけない。今のわたしたちには何ができるのだろう。

今、ほとんど不自由なく過ごせている私たちは、避難している福島の仲間が福島に戻ってきたときに、「住みよいふくしま」を作っておく必要があると思う。

そして、共に福島を発展させるために力を尽くすことができる人になっておく必要があると思う。ぜひ、お家の人と、8年前のその日はどんな様子だったのか。その後、大人たちはどうやって暮らしていたのか。これからどうしていけそうか。などについて、話し合ってください。

そうして記憶をつなぎ、福島を元気にしていくことが、福島に生きる私たちの使命である。

福島の未来を担う皆さんだからこそ、3月11日という日を大切にしてください。さらに、この震災

で失われた多くの尊い命を思い、犠牲になった方々全てのご冥福をお祈りする日でもあることを忘れないでほしい。

集会の後、会場を後にする子どもたちの表情が、少し引き締まったように見えました。

「平成31年3月11日の講話」

中島村立吉子川小学校 校長 石沢 泰蔵

今日は3月11日です。8年前の今日と同じ日、平成23年3月11日に東日本大震災が起きました。その時、だれも経験したことのない地震による大きな揺れと、地震がもとになって起こった津波が、東日本の海側を襲いました。福島県では、この大きな津波によって原子力発電所が事故を起こし、放射線から身を守ることにについて、正しく知ったり考えたりしなければならなくなりました。

この震災で亡くなった人は、日本全国では、約16,000人、福島県だけでは約1,600人とされています。今日は、朝のうちからテレビのニュースなどで伝えられていますね。皆さんは、家に帰ってから、東日本大震災に関係のあるニュースの中から、自分が関心を持ったことや、よく分かったと感じたことを心にとどめてください。

私からは、皆さんに見て欲しいものと聴いてほしいことを準備しました。

◇当時の朝刊：1面のみ3日分



平成23年3月11日 福島民報
地震など想像できなかったその朝



3月12日 福島民報
地震と津波の被害だけの新聞に…



3月13日 福島民報
原発事故が一番大きな扱いに…

◇児童作文：ふくしま子ども宣言作文コンクール作品「広がる未来」より

石川小学校 6年児童の作品（平成26年）※「ふくしま道徳教育資料集」に掲載

- ・酪農家、農家の方々が、放射線の影響（風評被害）で深刻な状況に陥って苦しんだこと
- ・家族が助け合って“広がる未来”と言える程の希望を持って頑張っていること

今日、午後2時46分に、村の防災無線で追悼（黙祷）の放送、サイレンがあります。担任の先生と一緒に、震災の日のこと、震災、津波で亡くなった人、被害に遭っても頑張っている人のことを思い描き、心を静かにしてみんなで祈りましょう。

双葉町立双葉北小学校 校長 松本 美穂子

絵本（「ひまわりのおか」「あのひのこと」など）の読み聞かせ

震災を知らない子どもたちが多くなっています。忘れないという今までの思いから、次は、語り継いでいくことが大切なのかと思います。

絵本を通じて、やんわりとふるさとについて・命の大切さについて・震災等について等を考えさせたい。

葛尾村立葛尾小学校 校長 遠藤 裕一

震災があり、避難した時には、昨年度の6年生が幼稚園に在学中であったため、当時の幼稚園の先生に小学校の「3.11集会」に来てもらい、避難から幼稚園を再開するまでのいきさつについてお聞きしました。

その中身は、昨年度の6年生は、避難してからも「葛尾幼稚園に通いたい。」「葛尾幼稚園じゃなきゃ幼稚園にはいかない。」と言っていたこと。

その気持ちを受けて、幼稚園を震災直後の平成23年9月から三春町の「たむら農芸センターさくら湖みどり館」を借用し「葛尾幼稚園三春分校」を開園したこと。

まとめると、子どもの思いを受けて幼稚園が開園されたという、双方の思いが重なって今があるということ、子どもたちに感じてもらうことができました。

川内村立川内小学校 校長 草野 収

震災以降おつきあいのある方や川内村出身の方、震災により川内村を離れた方など、現在も全国より様々なご支援があります。その都度子どもたちに話していることは「全国の方々よりの支援に対して、皆さんがその一人一人にお礼を言うことはできません。そこで、感謝の気持ちを表すには、皆さん

んが勉強や運動、学校の行事に一生懸命に取り組むことであり、地域のイベントに、積極的に参加し、元気な姿を見せることです。支援してくれている人も、皆さんが元気に頑張っている姿を望んでいることと思います。」ということです。

富岡町立富岡第一小学校 校長 岩崎 秀一

「これからを生きる子どもたちへ」と、震災後言い続けている内容。
 「笑顔」笑顔には自分も相手にも元気にする力がある。笑う門には福来たる。辛いときこそ笑顔を忘れないように。
 「元気」元気があれば運動だって勉強だって頑張ることができる。そして元気であれば人に優しくできる。
 「前向き」過去と他人は変えられないが自分と未来は変えることができる。夢や目標を持って生きてほしい。
 「感謝」震災後、全国のたくさんの方たちから支援を受けてきた。まずはそのことに感謝しよう。そして、大人になったら支援される人から支援する人になってほしい。
 以上が今でも言い続けている四つの言葉です。

式 辞

「平成23年度 浪江町立津島中学校 修了式 式辞」

福島市立福島第一小学校 校長 糺田 祐子

日時 平成23年7月23日

会場 二本松市勤労者研修センター

3月11日、マグニチュード9、10mをこえる津波、そして、双葉郡全体が原発事故にみまわれ、この日を境に、私たちの学校生活も日々の暮らしも一変しました。浪江町民全員が避難するという予期せぬ事態が突然訪れ、ご家族の方々をはじめ、皆さんは、どんなにか、戸惑い、不安で心を痛めたろうと思うと、今も、心が締め付けられそうになります。

東日本大震災から4ヶ月、大きな生活環境の変化に耐えて、皆さん、よく辛抱して新しい環境にたちむかってきましたね。とても立派でした。私は、皆さん一人一人の生活や学校での様子を、兼務で出向いている先生がた、各校の校長先生がたから報告を受けていました。

両親から離れて親戚の家で頑張っている人、運動で活躍した人、借り上げ住宅から歩いて学校まで通っている人、地元の卓球教室に通って交流を図っている人、宿題を今までよりしっかりと取り組めるようになった人など、皆さんが環境の変化の中にあっても、自分のすべきことをしっかりと見つめ、一つ一つ着実に取り組んでいる様子を聞き、たくましさやしなやかさをうれしく感じていました。

現在浪江町は、復興に向けて町の再建計画を打ち出し、きめ細かな線量調査や町民の健康診断などを実施しています。これは、皆さんが安心してふるさとに帰るための道しるべを構築するためのものです。学校の放射線量は決して低くないですが、様々な方々の努力で帰れる日がそう遠くなくきてくれることを心から願っています。私は、皆さんの若いしなやかさやたくましさは今後の町の復興の原動力になると信じています。

さて、23年度を迎え、皆さんがさらに成長するよう二つのことを心に刻んでほしいと思います。

一つは、「何事にも挑戦すること」です。被災していると、何をするにもおっくうになったり、うまくいかないことを他人のせいにし、気持ちが萎縮してしまうことがあります。でも、あえて、こんなときだからこそ、「挑戦する」気持ちをもってほしい。新しい環境だからこそ新しいことに挑戦できる。新しい学校、新しい友達、新しい夢など、勇気をもって挑戦していくこと。そして、皆さん一人一人が、今の環境の中にあっても自分を見失うことなく、自分のなすべきことを挑戦する気持ちで着実にやっていくことです。そんな、日々の積み重ねが、自分に力を付け、未来の自分を作り、ひいては、復興の力につながっていくと思っています。

二つめは、「絆を大切にすること」です。今回、各地からの励ましに、人のあたたかさ、つながりの大切さを感じることができました。人は一人では生きていない。家族の生活を守ろうと頑張っている親に、家族に、支えてくれる今の学校みんなに、地域の人に、支援してくれる日本中、世界中の人々に感謝し、人と人とのつながり「絆」を求め、大切にしていきたいです。

私は今、浪江町教育委員会で児童生徒の皆さんが楽しく学校生活を送ることができるよう教育相談活動などを行っています。役場にいると様々な方々がお見えになったり、連絡をくれたりします。日本全国から、ボランティアで相談活動をお手伝いする方、離れた知り合いを訪ねてくる方、本や学用品など

たくさんの物資もいただきました。人は人を支えたい、何かしたいという気持ちをもっているし、行動で表現したいと思っている人の絆、つながりをもとめていくことで心が豊かになれると感じています。23年度、「何事にも挑戦すること」「人と人の絆を大切にすること」この二つを心に刻み、充実した二学期・三学期を送ってほしいと思います。

保護者の皆様、本日はご多用の中、遠方よりお集まりいただきありがとうございます。突然、避難生活を強いられた心の痛みは察するにあまりあるものと思います。心よりお見舞い申し上げます。どうぞお心を強く持たれて、子どもたちに寄り添い、ご家族力を合わせてこの時期を乗り越えてほしいと思います。皆様のご健康とご清栄を教職員一同心よりお祈りいたしております。

最後になりましたが、今後の皆さんのたくましい成長を願い、式辞と致します。

浪江町立津島中学校長 糎田 祐子

注釈) 震災と原発事故後、津島中の生徒は、浪江町を離れ県内外に分散し避難しました。そのため、津島中の1・2年生は年度内に修了式ができず、7月23日に浪江町から離れた二本松市に集まり修了式を行いました。

「平成24年度浪江町教職員離任式 代表離任のことば」

日時 平成25年3月28日(木) 午後1時半
会場 浪江町役場大会議室

本日は、私たち転出者のために、町長様はじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、離任式を開催していただき、心より御礼申し上げます。

優しい日差しと海からのさわやかな春風に迎えられ、私たちは浪江町に着任しました。それぞれの任地において、地域の皆様に支えられ地域の特色を生かした教育活動を展開して参りました。元気いっぱいの浪江の子どもたち。ひたむきに学ぶ姿は、いつも、私たちに深い感動と力を与えてくれました。

23年度の教育構想を練り上げた矢先の3月11日。突然私たちを襲った東日本大震災および原発事故は、私たちと子どもたちから、学校生活の一切を奪っていきました。長時間に及んだ激しい揺れ、予想を遙かに超えた大津波、目に見えない放射能の恐怖、津島地区での避難生活、二本松方面への全町避難。そして、度重なる引越しと転校。避難生活は、子どもたちに取って私たち大人の想像をはるかに超える厳しいものとなりました。何も言えずに別れた友達、身近な大人の怒りと不安を目の当たりにした子どもたちの不安や葛藤は、どんなに大きかったことか。突然襲った現実のものとは思えない現実、私たちは教職でありながら、時に、自分たちではどうすることもできない無力感に襲われることもありました。

子どもたちを救いたい、不安を少しでも和らげてあげたい、何とかしなければ、という使命感が、私たちを突き動かし、兼務の傍らの教育相談や家庭訪問・学校訪問など、それぞれの立場でできる子どものケアを続けてまいりました。避難所を訪問した私たちを見つけて走り寄る子ども、堰を切ったように避難の経過を話す保護者の方々、役場で会った私を見て泣きじゃくる子どものほほをなでながら、その心の痛みの大きさに私の心も押しつぶされる思いがいたしました。

しかし、厳しい現実にあっても、子どもたちは少しずつそれぞれの環境を受け止め、次第に適応していきました。そのけなげな姿に、あらためて、子どもの柔軟さ・しなやかさを感じました。

この震災は、地域にとって学校が存在する意味は何か、真に子どもに寄り添うとはどうあればいいのか、保護者を支える教師の役割とはなど、普段の学校生活において、実践してきたことの意味をあらためて問いただすものとなりました。

浪江町を離れる今、この被災の経験を生かし、自分の職責を果たしていくことが浪江町での勤務の証であると思っています。新任地におきましても、地域における学校の役割を自覚し、誠心誠意、子どもたちの心に寄り添った教育に邁進して参りたいと思います。

子どもたちがふるさと浪江を目にすることは、まだ先になるかもしれません。しかし、人と人とのつながりこそふるさとです。私たちは、いつもどこにいても、浪江の子どもたちの応援団です。つながりを大切に、心のふるさととして、子どもたちをこれからも支えていきたいと思っています。浪江の子どもたちが、この震災の経験を生かし、広い視野と真に優しい心と知恵を持ち、未来の復興を担う人材として、たくましく成長してくれることを心から願っています。

復興道半ばの浪江町を去ることは、本当に心残りです。浪江町の復興と学校の再生を心からご祈念申し上げます。最後になりましたが、これまでご支援いただきました浪江町当局、浪江町教育委員会、関係の皆様方に深く感謝申し上げます、転出者を代表しての挨拶といたします。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。

平成24年度 浪江町教職員転出者代表
浪江町立津島中学校長 糎田 祐子